にも、たちまち戦後復興の高らかな足音が響き出し、旧陸軍飛行場跡は羽鳥ダムの通水により豊かな水田地帯に変わろうという計画が早速実施に移されだした。召集されていた兵士達も、ぞくぞくと復員してきた。老人や女性によって保たれていた耕地に、復員した人々の確かな力が投入されるようになった。

日中事変、太平洋戦争を通じて、戦没した人々の名を列ねた碑が、矢吹神社・中畑八幡神社・三城目学校山に、それぞれ建っている。戦没者の数は矢吹地区二二七名、中畑地区九八名、三神地区一一七名、合計四四二名に達している（『矢吹町史』4巻 資料編Ⅲ5—七六九）。

昭和二十一年の矢吹町全部の人口が一万三、五七七名（内男子六、三一九名）。男子人口比率でいうと、約六・九パーセントの尊い人命が失われていることになる。高価な代償を支払って購った希望と平和である。

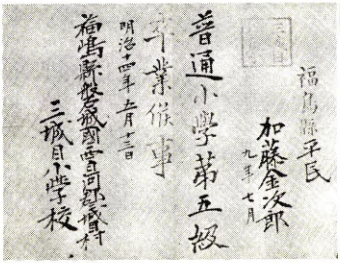
（幕田　耕郎）

第四章　教育と文化活動

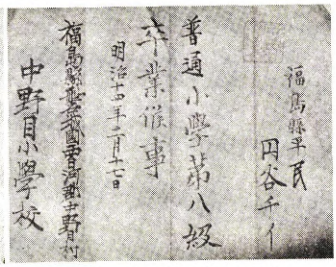
一　教育の普及

学制発布

「自今以後、一般の人民（華士族農工商及婦女子）、必らず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」（「学事奨励に関する仰せ出だされ書」）という構想を新政府が高く掲げたのは、明治五年（一八七二）であった。学制の発布である。学校教育を全国画一的に制度化することは、国民の知的水準を高め、国家の近代化の富国強兵を志向する政府の強い要請であった。


福島縣平民
加藤金次郎
九年七月
普通小學第五級
卒業候事
明治四年弁十三日
福島縣教學局
三城目小學校

三城目小学校普通第五級卒業証書
（三城目　加藤忠八蔵）


福島縣平民
円谷千代
普通小學第八級
卒業候事
明治十三年十月十三日
福島縣教學局
中野目小學校

中野目小学校普通第八級卒業証書
（矢吹中町　円谷重夫蔵）

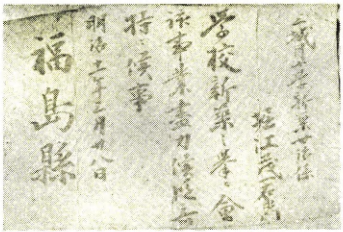
これによって、すべての父兄が六歳以上の幼童を男女の別なく、小学校に就学させることが義務づけられた。学制はフランスの制度にならったもので、小学校の義務教育制が確立した。全国を八つの大学区に、一大学区を三二中学区に、一中学区を二一〇の小学区にわけ、一小学区は人口約六〇〇人を単位とした。学校の建設・維持費、教師の俸給などは学区住民の負担であり、児童より月謝を徴収することを認めた。これらは住民にとって重い負担であった。小学校の年限は、下等四年上等四年とし、下等の就学が義務制であった。八級から一級までとし、六ヵ月で一級を修了、及落の認定は定期試験によってなされた。

小学校創立

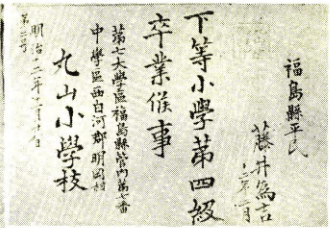
西白河郡で最もはやく設立された小学校は、中野目小学校と三城目小学校であり、明治六年（一八七三）一月二日創立である。ついで同年六月一日矢吹小学校が、九月二十三日中畑小学校が開校した。草創期の村の小学校は、いずれも一校一学級一教師であった。

中野目小学期は、中野目村塚原の廃寺となっていた薬師寺を仮校舎として開校した。就学児童は、明岡村と新田村より四人が、中野目村より一一人、神田村九人、川辺村一一人、中畑村と大畑村四人、堤村七人、学区外より矢吹村一人、笠石村一人の四八人が入学した。

開校当時、児童は「全部講堂に集まり、三字経より四書・五経に進む。夜は油をたいて勉強し、毎月一次小試験をして級を定める。大試験はまだやっていない。習字は伊呂波、数名。十二支等教え、その運筆の巧拙を検査して等級をきめる。算術も必須課目である。幼い者は一〇名を一組として学業の優れた者に看護



三城目小学校新築についての感謝状
（三城目　堀井俊　蔵）



丸山小学校下等第四級卒業証書
（神田　藤井森正　蔵）

させ」た（石井有信「文稿」）。

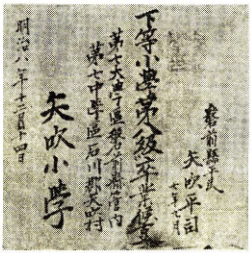
三城目小学校は、三城目村と須乗村を学区としている。

中畑小学校は、大畑・中畑二村を学区としている。中畑村の澄江寺が仮校舎となった。開校時の就学児童は一九人で、女子はいない。

矢吹村には、すでに万延元年（一八六〇）より大福寺に住職の花房実賢を師匠として寺小屋がひらかれており、小学校になる前には、一〇歳から一五歳の少年四八人、少女一二人が学んでいた。

矢吹小学校は、明治六年（一八七三）六月一日、この大福寺境内に、筆子（児童）たちの父兄の寄附による寺小屋の舎屋を仮校舎として開校した。教師には花房のほか、士族の茅根公義を招請した。学区は、矢吹村・中畑新田村・大和久村と、岩瀬郡柿ノ内村・久来石村・笠石村であった。

次に、開校後より明治十二年（一八七九）の学制廃止までの、各校の動向を追ってみよう。



矢吹小学校下等第八級卒業証書
（矢吹町　佐藤辰三　蔵）

中野目小学校は、明治十一年（一八七八）五月、遠隔の川辺・中畑・大畑・矢吹・笠石村の児童を分離し、学区内の明岡・明岡新田・中野目・神田・堤の五か村に松崎村を加えた六か村を学区に改編した。そしてそのほぼ中央にあたる明岡村丸山に校舎を新築し、中野目小学校を閉校して丸山小学校を開校した。しかし、丸山

中畑小学校初等第一級卒業証書
（中畑　田中喜造　蔵）

小学校は人家のない山中にあったので、通学路程の条件悪く、欠席・不就学児童がふえたため、三ヵ年で閉校となった。明治十三年四月、中野目の中野目小学校が復活し、松崎村に分教室がおかれることになる。

三城目小学校は、明治十一年三月に三城目上野の通称上野山という高台に、四教室の校舎を新築した。

矢吹小学校は明治八年、大福寺門前に本校舎を建築し移った。敷地は五畝二六歩、建坪は四九坪である。明治七年における在籍児童数は四七人（男三六、女一一）、八年には六〇人（男四九、女一一）である。

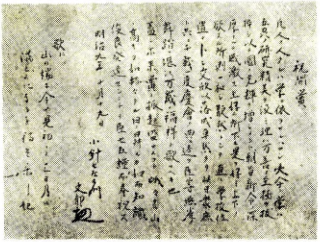
明治七年八月十七日、笠石村に宝泉寺を校舎として笠石分校をおいた。この分校は笠石村が学区から分離する明治十二年まで続いたのであろう。

明治十年七月、大和久村に大和久分校を開設した。同校は、翌年本校に吸収廃校されたが、十二年に復活し十九年六月に再び本校に併合される。

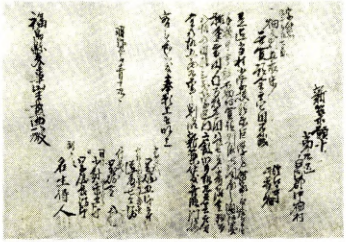
教員は、士族石井有信（月給七円）らが増員されてくるが、十年には二人の女性が「生長」として採用されている（月給一二銭五厘）。十～十一年に助教として勤めた（月給一円）小針重雄は、その後自由民権運動に投じ、加波山事件に連座して逮捕され死刑に処せられた。二二歳であった。

小学校の試験には、小試験や進級試験である定期試験・卒業大試験と、他校と合同して行われる比較試験があった。十一年（一八七八）末の連合比較試験で三九人の児童が「秀抜」となり、二五銭～一五銭の賞与を受けている。同年「無懈怠出校」（無欠席）で県より一〇銭の賞与を受けた児童は一九人である。

中畑小学校は、村内の中宿上に明治九年（一八七六）十二月十九日にいたり新校舎をつくり、仮校舎の澄江寺から移転した。



中畑小学校開校祝辞（中畑　小針頼晴蔵）



中畑小学校新築願書（中畑　小針頼晴蔵）

中畑村より県に提出した「新築願書」によれば、敷地買収費は澄江寺所有の畑五畝歩が一円二〇銭、建築費は概算三〇〇円である。三〇〇円のうち、一一一円八七銭は寄附金、残りは学区内の二一九戸が各八五銭九厘を負担する計画であった。結局工費は四五四円九銭六厘三毛かかっている。開校に当たり岡崎長次郎ら学校係は「今ヨリ入校進歩生徒幾許ナラズシテ知識ヲヒラキ、報国尽忠ノ期ニソハザルハナシ。学区内ノ戸々子孫ノ幸福、富国強兵ノ基礎、蓋ゾ歓喜セザル可ケンヤ」と述べている。

政府の義務教育への意志は高揚し、学校をたてさせ就学を強制したが、民衆側にはそれに応える教育要求はなかった。また、授業料・寄附金等、学制に伴う財政負担が民衆には重かった。学制発布の後、第九区学区取締が中畑村の用係・村長・学校世話方へ宛てた「村々民心得」は、「頑愚に父兄道理を弁へず、吾愚を主張しその愚を又子弟にゆずらんと欲するあり」「学制を了知せざる盲目なり」「小学校ありてその校に就学せしめざるの父兄は……その子弟の不幸のみにあらずして、実に天地の罪人なり」と嘆いている。（学区取締とは、土地の名望家から知事が任命し、一人が二〇～三〇の小学区の学務全般をとり締った）。

また、何年か不明であるが、石川郡学区取締から中畑村用係に宛てて、「未だ私宅に生徒を置」く父兄に就学を督励するよう、次のように通達している。

「小学校ハ、児童ノタメニ志気ニ定立シ、品位ヲ附与スルノ所ナリ。ソレ、人誰カ其ノ家ヲ顧ミザラン。又誰カ其ノ旧里ヲ愛慕セザラン。然ルニ、其ノ村内ニテ未ダ私宅ニ生徒ヲ置候趣相聞キ、不都合ノ事ニ候。之ニ依リ長官御巡回前、右様ノモノコレ有リ候ハバ急度取調ベ置カレ候。其ノ儘差置キ候ハバ大イニ不都合相生ジ候条、念ノ

為通達ニ及ビ置キ候也」。

創立時に就学した児童は一九人であったが、次年度は女子六人を含んで二六人になり、十一年には男子三七人、女子一二人である。進級試験には、まれに及第できない者がいた。教員は一人で初代の中森吉見から十二年まで五人がかわっている。

なお、明治九年明治天皇の東北巡幸で矢吹を通過されるさい、近郷近在の学童が奉迎しているが、それについては〈明治天皇御巡幸〉の項で触れる。

教育令以後

啓蒙的な理想をかかげ、「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人ならしめんことを期」した学制は、しかし、画一的統制的であった。教育内容も高度すぎた。また、教育要求も経済負担力も、薄弱な民衆には重すぎた。

明治十二年（一八七九）に、「教育令」が出されて、学制の監督統制をゆるめ、児童の就学強制を弱める現状適応の方向をうちだした。しかし、「自由教育令」といわれたようなこの教育令は、翌十三年にはやくも放棄され、「改正教育令」がだされた。これによって、就学義務は強化され、教育の国家主義的官僚支配が強められた。従来の下等・上等小学校は、初等・中等・高等科小学校に改編された。

明治十九年（一八八六）には、「小学校令」が制定。これにより小学校は尋常科四年・高等科四年の二段階となり、父母後見人の学齢児童を就学させる義務は尋常小学校四か年修了までとなり、従来よりも一カ年延長された。高等科四年の就学は自由である。小学校の経費は主に学童の授業料と寄附金によったが、不足のときは区町村会の議決によって区町村費から補足されることになった。教科書は文部大臣の検定したものに限った。

明治二十一年（一八八八）市町村制が、同二十三年郡制・府県制が制定され、地方自治の制度が定められた。それにともなって二十三年、小学校令は「新小学校令」に改正された。これによって修業年限は、尋常小学校が三カ年または四カ年となり、高等小学校は二カ年または三カ年・四カ年となった。また小学校に専修科・補習科をおくことができるように

した。

小学校の設置維持は、市町村の責任においてなされた。授業料も市町村の収入であった。新小学校令になって、府県知事に任命され、郡長の指揮命令をうけて郡内の教育事務を監督する郡視学がおかれ、教育行政の統制を強化した。

明治二十二年に憲法が発布され、帝国議会の開設を前にした明治二十三年（一八九〇）、教育勅語が天皇の名のもとに公布された。この宣言にみられる教育の国家主義は、以後の教育を貫いてゆくばかりでなく、勅語で強調された忠孝の徳目は、国民の生活全般の道徳律となった。

日清・日露の両戦争は、この国家主義をさらに深めていった。明治三十三年（一九〇〇）小学校令が改正され、義務年限は四カ年となり、授業料を徴収しない原則が示された。明治四十年（一九〇七）の最終的改正では、義務教育が六か年に延長され、それに高等小学校二カ年が付加された。低調であった学齢期の幼童の就学率は、日清戦争頃より上昇し、日露戦争の時点ではかなり高まっている。

三　神小学校

明治十一年開校した丸山小学校は、前記のように十三年に閉じられ、中野目小学校が復活した。同時に松崎村に分校もおかれた。

三城目小学校は、明治二十年度より三城目尋常小学校となり、中野目小学校を合併した。須乗分校が三城目小学校の分校として設けられた時期は明らかでないが、この年廃されている。須乗本田と新田学区としていたが、児童数は四、五人と思われる。

中野目には一・二年生だけ通学する分校をおいた。二十年末の三城目尋常小学校の児童数は一一三人である。

明治二十二年（一八八九）四月、三城目・須乗・神田・堤・中野目・明新が合併して三神村が成立しているが、二十五年十一月三十日に三神小学校と改称した。二十八年九月一日、三城目校舎は三城目・須乗を学区として、三神第一尋常小学校、中野目校舎は中野目・堤・神田・明新を学区として、三神第二尋常小学校となった。四十年一月四日、農業補習学校が付設された。

この両校は明治四十年四月二日合併、義務就学の尋常科六年に高等科二年が加わり、両校舎による三神尋常高等小学校となった。

明治四十四年（一九一一）一月九日、現在地の三城目寺院に新校舎が落成し移転した。

明治四十五年（大正元年）十二月十日、明新の上小屋敷に、中野目校舎の一部を解体移転して季節分教場が設けられた。ここに明新と神田の一・二年生が冬季間三ヵ月通学した。この年の児童は一四人（男一〇、女四）であった。

明治末年の壮丁（満二〇歳の男子）検査についてその学歴をみると、検査者二七人のうち尋常科未卒業が七人、尋常科卒一三人。高等科卒四人、小学校以上の学歴者四人である。

卒業生の故老の回想―【明治三十一年入学生】「下等・上等小学校時代、上等小学校四か年を卒業する児童は、この近在にはなかったようである。三城目小学校のある高台は粘土で下は岩盤なので、井戸の水がでなかった。児童が約一〇〇メートル下の民家の井戸から手桶で水を運びあげた。雪の深いときなど実に辛かった。通学に男子は足中草履（あしなかぞうり）をはいた。雨の日は裸足、雪には藁靴だった。」【明治三十六年入学生】「姉さんの子守り学校に連れられて、六ツ七ツと一年生の教室でいろいろ習った。八ツの年に二年生に編入方お願いした。三城目と中野目の小学校が合併した頃、高等科二年の生徒が同盟休校騒ぎを起して乙字ヶ滝へ逃避し、西白河郡役所へ連名の手紙を出したことがある。」【明治四十二年入学生】「お寺であった中野目の小学校校舎は、お寺時代の仏様の心がにじんでいて、私達の心体に移り香となってしみ込んだような気がします。」

矢吹小学校

明治十二年、矢吹小学校の学区が矢吹・中畑新田・大和久の三ヵ村となった。この年、大和久分校が復活したが、十九年には本校に吸収される。十三年、二階だて校舎増築。

初・中・高等科の小学校となると、周辺小学校は初中等しかなかったので、高等科を志望する生徒は矢吹小学校に通学した。

二十二年における在籍児童は一三九人（男九五、女四四）で四学級ある。退学者が一三人（男七、女六）いる。この年

の学齢の人員が三二五人であるから、就学率は四・三パーセントである。二十六年には、学齢人員三五九人（男一八八、女一七一）、在籍児童数一八七人（男一二九、女五八）、就学率は五二パーセント（女子三四パーセント）である。中途退学者が二三人（男一二、女一一）いる。中退者は累年多く、前年は四八人（男二〇、女二八）もいる。この年の学校の決算は三六二円二九銭、財源は村税と授業料。支出の内二七七円八四銭七厘が教員給料である。

明治三十四年四月十日、現在地に新校舎が落成し移転した。敷地は一、三三四坪、建て坪一九四坪、七教室である。旧校の跡には矢吹村役場が、旧校舎の一部をつかって建てられた。この年から矢吹尋常高等小学校となった。

三十五年十二月二十六日より矢吹村が町になったので、町立小学校となった。三十七年に児童は六学級三四六人であるが、就学率は男子九三・七パーセント、女子も八〇パーセントに上昇している。

三十八年二月十日、小学校内に矢吹町立農業補習学校を併置した。矢吹町にはじめて電灯の灯った年である。四十一年には校内に九反畝の農園を設けている。

卒業生故老の回想―【明治二十八年卒業生】「勉強でいちばん印象に残っているのは、修身の時間にたたきこまれた忠孝の道です。教科書があったのは読み方の読本（とくほん）だけです。鉛筆はありませんでしたから、漢字の書きとりはノートに筆で書きました。服は、すっぽ袖の着物に兵子帯だけです。校長先生は洋服でしたが、その他の先生は羽織袴（はかま）でした。〝学校なんかにあげるとロクな者にならない〟といって子守りの店屋の小僧にやられた人も多くいました。」【明治三十一年卒業生】「小学校は今の役場の所にありました。瓦ぶき二階だて土蔵・玄関つき、外に木造平屋だての教室もありました。川崎村中畑村の小学校と合同運動会が小池原にひらかれたこともありました。唱歌は君ケ代や軍歌でしたが、はじめてオルガンで鉄道唱歌を習いました。高等科を卒業した時白河の郡役所で賞をいただきました。」【明治三十六年卒業生】「毎日の日課は習字に書取りに喧嘩くらいでした。雪の降った冬の教室では火鉢がでます。くべる薪は子ども持ち、燃やしているうちに教室が煙でいっぱいになると、消したりまたつけたり、勉強にもなりませんでした。」【明治四十三年卒業生（女）】「入学は日露戦争の時で、従軍看護婦がほうたいをまく遊戯などをやり、看護婦やナイチンゲールは私たちのあこがれで

した。雪の日は、ケット毛布を二枚折りにしたもので体をおおい、メリンスのおこそ頭布で頭や顔をつつんで歩きました。」

中畑小学校

明治十二年（一八七九）の在籍児童は五三人であり、男子四一人、女子一二人である。同十三年九月十一日、松倉村に松倉分校が設けられたが、十八年五月二十九日には廃された。二十年四月尋常小学校となる。同年北平山村が学区に編入され、北平山分校がおかれたが、二十二年七月に中畑・大畑・松倉の三村が合併して中畑村となった折、北平山は関平村と合併したので、北平山は学区から分離した。この年の在籍児童数は一五八人である。四十三年には児童数が二二四人になっており、校舎が狭くなったので児童の一部は根宿の来迎院に移った。明治末年（大正元年）九月、大暴風で校舎が大破し、澄江寺と正福寺を仮校舎とした。

就学状況についてみると、明治三十二年には、学齢児のうち男子はすでに九三パーセント就学しているのに、女子は二七パーセントにすぎない。三十五年には就学率男子九四パーセント、女子四六パーセント、日露戦争のはじまった三十七年に女子も八〇パーセントに上昇し、すでに戦争が終った三十九年には女子も九六パーセントになっている。

明治末年には、学齢児二五三人のうち二五一人、男女ともほぼ全員就学している。

卒業生故老の回想―【明治二十四年入学生】「学校のまわりは、丸太棒の先をけずって抜を通した塀がたてられてあって、先生は恐ろしかったものだ。遅刻すると机のふたを持って立たされた。長い着物に帯を締め、風呂敷に道具を包み背負って通った。握りめしのお昼だった。中畑小学校を了えてから泉崎小学校の高等科に通ったが、藁草履ばきで時々裸足でいったこともある。」【明治三十八年入学生】「当時の校舎は、澄江寺の境内で、今の中畑農協の集荷場の辺でした。校舎は木造かや葺、窓は格子、明治三十五年の暴風で傾いたので、つっかい棒がしてあった。思い出してもわからないことがある。一年に入学した時五〇人いたが、卒業の時は二十数人くらいだったこと。欠席の生徒が非常に多かったこと。運動会は矢吹原までいって行われました。運動場は道路と共有でした。」【明治四十一年入学生】「根宿の来迎寺の校舎は竹と杉に覆われて、雨降りの時は暗くて黒板も見えぬ有様で、何時間でも休んでしまう。明治四十五年学校にオルガンが到

着した。村中の評判はたいしたものであった。」

夜学会　青年有志が同志的結合をもち、学習と修養に努める夜学会は、明治十年代から各地におこなわれた。青少年の道義の退廃を矯正しようとする意図と、近代的軍隊の強力な兵士育成という軍事的要請が高まり、ことに日清戦争後、行政指導により各地に夜学会がつくられた。これは「壮丁予備教育」ともいうべき学習組織であった。

矢吹については不詳であるが、西白河郡内に明治三十三年度には、一一の夜学会（小学校を会場とするもの七、民家会場四）があった。一五歳から二五歳の青少年二七一人が会員であった。十一月から四月まで九〇～一二〇日間、一日三時間行われた。小学校教員が教師となり、教科は読書・作文・算術、テキストは小学校高等科程度のほか、『日本外史』『近古史談』『文章軌範』『四書』が用いられた。

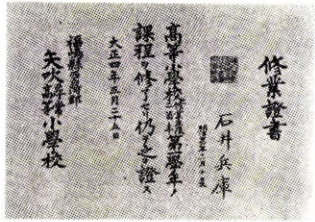
実業補習学校　夜学会は、やがて実業補習学校という勤労青少年を対象とする社会教育機関に改編され、全国に普及していく。

西白河郡の場合、いずれも小学校に併置され、白河町立実業補習学校のほかは、すべて町村立農業補習学校である。矢吹町には明治三十八年（一九〇五）に、中畑村には四十一年、三神村は四十二年に設置された。三校とも生徒数は四〇～五〇人であり、修業年限は二か年であるが、授業は夜間で季節的な開講であろう。矢吹農業補習学校に女子部が附設されるのは大正五年である。

（金子　誠三）

二　大正期の教育

明治より大正へ　明治四十年（一九〇七）三月二十一日、小学校令の改正が公布され、今まで四か年であった義務教育が六か年に延びて、尋常科が四か年から六か年になった。高等科が二ヵ年または三ヵ年となった。矢



矢吹小学校高等一年修業証書
（本町　石井兵庫蔵）

吹小学校に高等科ができたのは、明治三十四年（一九〇一）四月一日からで、それ前までは須賀川小学校の高等科に毎日歩いて通学していた生徒もあった。この頃高等科のなかった小学校では尋常科四ヵ年を卒業すると補習科にあがるようになっていた。

明治四十年四月、今まで三城目にあった三神第一小学校と中野目にあった三神第二小学校が合併して、三神尋常高等小学校が三城目の学校山に開校した。三神小学校の高等科はこの時（義務教育が六ヵ年に延長した年）にできた。中畑小学校に高等科ができたのは大正九年（一九二〇）四月一日で、それまでは矢吹・三神のほか釜子などの高等科に通学していた。

大正元年九月二十三日、福島県の中通りと会津地方に大きい被害のあった台風で、中畑の三文橋は増水のため通れなくなり、中畑小学校の校舎が大破した。この時宿直の斉藤辰夫教員は真夜中に起き出して、村中に急を告げて歩いた。村ではさっそく松の木を持って来て校舎の北側に支え棒をしたが、同月二十九日に校舎の使用が禁止された。その結果澄江寺（本村）・正福寺（原宿）・来迎院（根宿）に分散授業をすることになった。（もっとも来迎院は前から教室に使用していた。）こうして澄江寺の前にあった学校はここから二〇〇メートル位離れた処に新しく校地を求め、校舎を新築したが、この時松倉や大畑などから通学距離が遠くなるといって反対運動があった。しかしそれも無事に収まり、大正二年十一月二十二日、新校舎が落成した。当時中畑小学校に通学していた人達はその頃の思い出をつぎのように綴っている。

「この時の小学校は、同じく澄江寺所有の雑木林で、当時の青年会員や消防団員の勤労奉仕で整地され、根宿の後藤留十氏の請負で完成したものです。その頃としては郡内でも立派な学校と言われたものでした。」

「三年生の時原宿の正福寺本堂東側の部屋で学習、三月の修業式には新しい学舎で行われました。四年生から新しい明るい学校で勉強できる喜びでひとしおでした。教室の掃除は当時は雑巾を用いず、藁たわし（三〇センチ位に切った藁に縄を巻いたもの）で、一日置きにヨイサヨイサの掛声で、足の膝頭をすりむき乍ら、廊下と教室を隅なく磨き上げ、テカテカと光ったのを見てよろこんだり

満足したりしたことを思い出します。」

「五年生の時校庭に移植した桜は、五・六年生が一本ずつ手入れを分担され、お互に一生けんめい手入れし、花の咲くのを楽しみにしました。」

「私共一同三〇名が大正三年四月一日に新校舎に入学しました。同時に桜の木も植えたものです。私ら五人一組になり、桜の木を手入れしたものです。」（中畑小学校創立百年記念誌「百年のあゆみ」）

明治四十四年には全国小学校の就学率が九八パーセント、出席歩合が九〇パーセントになり、義務教育六カ年もようやく軌道に乗ってきた。しかし学校に行かない子どもや学校を休む生徒がすくなくないので、県では就学率九五パーセント以上の市町村の小学校に一等就学旗（紫色）、九〇パーセント以上に二等旗（上・下紫、中、白色）八五パーセント以上が三等旗（上・下白、中、紫色）を授けて就学を奨励した。（明治三十四年四月県令）その結果、第一回の時（明治三十四年九月）一等なし、二等六校、六等五校であったが、第二回（明治三十五年）には一、二、三等合わせて六二校となり、同三十七年度二〇八校と、その効果があらわれ、明治四十四年度の県の就学率が九八・八五パーセントになり、中畑小学校の男児九九・二八パーセント、三神村の男児九五・五八パーセントになった（『福島県教育史』第一巻・資料編Ⅲ5―四八〇・四八一）。

中畑小学校新築記念

大正時代になると就学率ばかりでなく、生徒の出席をよくする方法がとられた。矢吹小学校では大正三年度から出席率の良い学級に出席奨励旗を渡して教室の入口に掲げた。（このような出席奨励法はどこの学校でも実施していた。）また矢吹小学校ではとくに学校を休む女生徒が多いので、大正二年（一九一三）五月から学校に乳幼児を連れてくる女生徒を集めて子守学級を開設した。この学級では学年のちがう女生徒を集めたので、個別教授によっ

て午前一時間か二時間、（週一二時間以内）修身・国語・算術・唱歌・裁縫などを女教員二名で教え、教室の一隅には乳呑児用の畳代用の敷物を敷いておいた（『福島県教育事蹟』第一輯）。また、生徒の登校をよくするために、大正六年度より児童通学団を組織し、各部落毎に通学団をつくって登校させるようにした。初年度は十分な効果をあげる事ができなかったので、大正七年度も引続いて実施するという反省をしている。

大正時代の小学校ではどんな教育していたのであろうか。矢吹小学校沿革誌の「毎年度教育施設経営及其成績」の中の一端を抜き書きしてみよう。

明治四十五年・大正元年度　○一〇月児童ノ予習復習ヲ実施セシムルコト（この項は大正三・五年度にもあり。福島県教育事蹟第三集に矢吹小学校では始業時一五分前まで三・四〇分間予習を、放課後三〇分間以内復習させるとある。）

大正二年度　○四月一坪農業ヲ実施ス（尋常科五年以上の生徒に、自分の家の耕地の内一坪を借りて、学校から種苗などをもらって作物をつくるというもの。）○十一月父兄懇話会児童成績展覧会ヲ開催ス

大正五年度　○四月天気予報旗ヲ校庭ニ掲グルコト　○七月当町消防組ト交渉シ児童水泳場ヲ設置ス　○大正六年二月方言卑語ノ矯正方法研究

大正六年度　○七月校長問題ヲ提出シテ各学年児童ノ学力ヲ調査ス（採点ハ校長之ヲナシ其結果ヲ担任ニ注意シタリ。読方ニ比シ算術ハ成績ノ劣レルヲ見ル）

大正七年度　○七月夏季練習帳（現在の夏休の友）ヲ使用セシムルコトトス

大正八年度　○十二月本校ニ学用品購買部ヲ設ク

このように大正初期の小学校教育は、明治時代の制度が定まったあとを受けて、教育内容を充実していこうとする時代であった。県では大正五年一月七日、つぎのような福島県訓令を出して、本県教育の向上を計ろうとしている。

一、学齢児童の就学出席を一層奨励すべし。二、児童の精神教育に留意すべし。三、教授の徹底を期すべし。四、体育に留意すべし。五、教員は常に修養を怠るべからず。六、小学校を以て地方教化の中心たらしむることを期すべし。七、補習教育に努力すべし。八、実業科加設の趣を徹底すべし。九、基本財産を蓄積すべし。一〇、発音矯正に努力すべし。

わが国では大正六年（一九一七）九月二十一日、臨時教育会議官制を公布し、日本教育制度の改革を目ざして、教育の

根本問題を審議する内閣の諮問機関として設置された。この会議では、小学校教育、男子の高等普通教育、大学教育及び専門教育、師範教育、視学制度、女子教育実業教育、通俗教育、学位制度の九つの問題についての諮問事項を審議し、これらの答申と他に二つの建議をした。このうち小学教育については、それぞれつぎのような答申をしている。

○第一回答申（大正六年十一月一日）

市町村立小学校教員の俸給は国庫及び市町村の連帯支弁とし、国庫支出金額はその半額に達すること。―原案では「国庫ハ財政ノ許ス限リ多額ノ支出ヲ為スヘシ」となっていた。―国庫支出金の分配支給は最も有効な方法によること。

○第二回答申（大正六年十二月六日）

一、小学校教育の根本方針に関すること。二、小学校教員の資格改善に関すること。三、視学機関の完備に関すること。四、補習教育の改善に関すること。五、義務教育年限延長に関すること。（――義務教育年限ノ延長ハ之ヲ希望スト雖モ今日ニ於テハ地方経済ノ関係等ニ鑑ミ尚其ノ時期ニアラズト認ム――）

○第三回答申（大正七年五月一日）

入学試験準備の不当な勉強を矯正する。家庭や社会との連絡を密接にすることなど。（『臨時教育会議関係文書目録』、『学制七十年史』、『福島県教育史』第二巻）

小学校授業風景

教授と訓育

臨時教育会議は大正八年（一九一九）五月二十三日の勅令によって廃止されたが、この会議で日本教育の目標がつぎのように定められた。

「国民道徳教育ノ徹底ヲ期シ児童ノ道徳的信念ヲ鞏固ニシ殊ニ帝国臣民タルノ根基ヲ養フニ一層ノ力ヲ用フルノ必要アリト認ム」（「殊ニ」以下の文は原案にない）「国史ノ教科ニ一層重キヲ置キ……国民道徳ニ資スルノ本質ヲ完ウセンコトヲ要ス」（小学校教育）

「教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ十分ニ体得セシメ殊ニ国体ノ観念ヲ鞏固ニシ廉恥ヲ重ンジ節義ヲ尊フノ精神ヲ涵養シ剛健質実ニ国家ノ中堅タルヘキ人物ヲ陶冶スルニ主力ヲ注グノ必要アリ」（高等普通教育）

「人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ一層意ヲ致サムコトヲ望ム」（大学教育）
「教育者タルノ人格ヲ陶冶シ其ノ信念ヲ堅固ニシ殊ニ忠君愛国ノ志操ノ涵養ニ一層力ヲ致スコト」（師範教育）
「教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ十分ニ体得セシメ……虚栄ヲ戒メ奢移ヲ慎ミ以テ我家族制度ニ適スルノ素養ヲ与フルニ主力ヲ注クコト」（女子教育）

このように臨時教育会議はそれぞれの教育の目標をきめてその性格をはっきりさせ、教育制度の確立を目ざしたので、文部省はこの答申に答えて教育制度をつぎつぎに改善していった。このため大正期の教育は、わが国の教育目標と制度が確立した時代であるということができる。ことに小学校教育の答申の中で義務教育費の国庫負担を教員俸給の半分とするなどは注意を要する答申であった。

大正期の小学校では、国民道徳を高揚するという小学校教育の目的にそって訓育を重視していた。矢吹小学校の沿革誌をみると、

明治四十五年・大正元年度　○七月敬神思想養成法ノ研究　○七月教育勅語及戊申詔書奉読式ヲ毎月実行ス
大正二年度　○七月作法教授ヲ励行ス　○一月性行調査及家庭訪問ノ実施
大正五年度　○十月本校児童訓育上特ニ努力スベキ点及其効果ヲアグベキ方法研究　○一月児童訓練条目ノ研究
大正六年度　○十一月訓練事項中特ニ努力ヲ要スルヲ執リ職員一致シテ之ニ当ル　〈規律、清潔、整頓〉（同年度末マデニ見ルベキ効果ヲアゲタリ翌年度モ継続）
大正七年度　○九月児童風紀上食事ノ作法ヲ定メテ実施　○二月児童中豆本ヲ耽読スルコト流行セリ有害ニツキ禁止ス
大正八年度　○九月毎年九月十三日乃木将軍ニ関スル講話ヲナスコトトシ実施ス
大正十二年度　○六月児童ノ自治会開設
大正十三年度　○十月御真影奉安庫並ニ神前等通過ノ際敬礼スルコトニツイテ　○十一月勤倹奨励運動ニツイテ

ときめこまかに訓育の方針を立てて指導している。

一方先生方は毎日の授業についてくふうをこらし、研究授業・教材研究を続けて、教授法の欠陥を見つけてその救済法をしらべ、児童成績品展覧会や体操演習会を開催してその成績向上をはかるなどの努力を続けている。

矢吹小学校ばかりでなくどこの小学校でも教授・訓育についてはこのように努力をしているが、その年の重点目標をきめて学校の経営に当っている。つぎに中畑小学校の大正十五年度の努力事項をあげてみよう（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―五三五）。

一、訓練ニ関スル方面
(一)自治的訓練徹底ヲ期スルコト
○学級役員会ト其ノ指導○学級自治会ト其ノ指導
(二)訓練的作業ノ実施ト公民的精神ノ涵養
○校舎内外ノ清潔整頓○学校道路及外柵土手ノ修理○神社仏閣ノ掃除○家庭作業ノ奨励○団体的訓練ノ重視
(三)詔書御趣旨ノ徹底
○本校実行要目ノ徹底
二、教授ニ関スル方面
(一)学習態度ノ向上ヲ計ル　特ニ能率向上ニ努ム
○特設学習時間ノ設置○学習法ノ研究ト其ノ指導○学用品ノ調査研究
(二)実力養成ニ努ムルコト（算術国語科平均点ノ必達標準七点）
○学科担任ノ加味○文庫ノ設備ト充実及其ノ利用○課外読書ノ奨励○劣等児ノ救済ニ努ムルコト○成績考査ノ度数ヲ多クシ並ニ測定標準ヲ定ムルコト○帳簿整理ヲ怠ラザルコト
(三)公民教材ノ取扱ニ留意
○村勢ノ調査ト理解○教科書中公民教材ノ調査研究○公民的時事問題ノ研究

これをみると訓練（訓育）を第一にあげており、その第一項に自治訓練をおいているのが目につく。矢吹小学校でも大正十二年（一九二三）六月に自治会を開設しているが、これは児童を主にした新しい訓練の方法である。また教授の項に算数国語の必達標準七点とあるのは、校長試験の時の学級平均点を指している。児童は先生から校長試験によい点を取るように尻をたたかれる。学級の平均点をあげるため、学校の成績をあげるために勉強させられる。児童の能力に応じて児童の能力を伸ばすという教育ではなくて、教師中心主義のつめこみ教育である。

このような教育を受けた児童の学校生活はかなりきゅうくつであるような感じがするが、児童は案外元気でまじめに通

学していたようである。大正時代小学校で学んだ人達の当時の思い出をつぎにあげてみよう。

「通学にはミニ着物に下駄ばきか藁草履で、冬は雪多くウス靴といったワラ靴で、襟巻をかぶり寒さをしのんだものです。……友達との遊びは縄飛び、陣取り、統監部、コマ喧嘩、お手玉等で、よく走り廻ったものです。……（先生方は）服装、礼儀、学習、掃除にきびしく、廊下を走っては叱られ、学習にふまじめであり、規則に違反してはよく立たされたものでした。」（三神小学校明治四十二年入学男児童）

「朝礼は雨の日以外は毎朝校庭の玄関前で一同整列、校長先生を中心に先生全部並んで、上級の級長の号令で「気をつけ」「礼」と朝のあいさつ、校長先生から注意事項、時には尊徳先生とか中江藤樹先生とか、偉人の一口訓話もあった。四大節以外の陸、海軍記念日、そのほかの記念の日には昔のその日のことがらを話された。教育勅語（三十日）戊申詔書（十三日）の奉読は毎月欠かさぬ行事で、今の陛下の仰せられたおことばは、一口に申し上げてどういうことかとときどき質問されたりした。手をあげて答えた子にはよくできたとほめてくれた。……薄葉先生が担任だった六年生の時にろく木、懸垂棒、平均台等が他校に先がけて設備された。」（矢吹小学校大正六年卒業男児童）

「（この年）今迄は手風琴（アコーデオン）が一つ音楽用備品としてあったが、音の出ないもので形ばかりで何にもならなかった。それが五月頃と思うがオルガンが到着した。中畑初まって以来の妙音を聞かせて呉れるので村中の評判は大したものであった。……大正二年の三月になった。いよいよ卒業である。……初めて聞く「君が代」と「螢の光」のメロデーにはただ驚くばかりで卒業したのを覚えている。」（中畑小学校大正二年卒業男児童）

「校庭には桜の大木が三十数本、吾が世の春を告げる時に運動会。母は前の晩からご馳走作りにおわれ重箱に行儀良く詰めて、酒瓶とむしろとござをまるめてかごに入れて背負ってくる。思い思いの場所に陣どってわが子の戦果を楽しく観てくれたっけ。……冬の教室には大きな四角の火鉢がひとつ、白炭が真赤に燃えていても後ろの席はすき間から吹き込む粉雪と寒さに、手に息をかけながら鉛筆を走らせる。霜柱立つ運動場で素足での陣取り遊び、穴のあいた弁当箱から梅干が顔を出している。」（矢吹小学校昭和三年卒業男児童）

「私どもが矢吹小学校に入学したのは大正十二年四月で、その年に関東大震災があり、大きな被害も出ました。土蔵の壁がくずれ、電線は切れ、余りの恐ろしさに遊んでいた子供同志が一せいになき出した記憶をもって居ります。……矢吹の町も昼頃ともなると、しもの方もかみの方も人の一人も通らないという全く閑散な街でした。このため学童も道路でまりつきをしたり、羽子板あそびをしたりしてのんびり遊んだものでした。この頃の通学の服装はカスリの着物にさんじゃくおびをしめ、こまげたをはき、カバンや風呂敷に学用品を包んで登校しました。」（矢吹小学校昭和三年卒業男児童）（中畑、三神、矢吹各小学校創立百年記念誌より）

大正期の教科書をみると、大正七年度から国語のほか修身、算術、地理の教科書が改訂された。たとえば国語では「ハタ　タコ　コマ　ハト　マメ」（尋常小学読本）から「ハナ　ハト　マメ　マス　ミノ　カサ　カラカサ」ではじまる「尋常小学国語読本」になった。また小学校令改正により、大正十五年四月より「日本歴史」が「国史」となり、各教科書共国民道徳重視の教材になり、これが昭和時代になって軍国主義の教育に傾いて行くようになった。

教育費

各町村では町村費に占める教育費の割合が大きいので、大へん苦労していた。旧矢吹町の町費の経常支出総額と、同じく経常支出の教育費をみると第73表のようになっている。これでみると教育費は歳出総額の五〇・七パーセント（大正期の平均）と経常費の半分を占めている。中畑村の村費をみても、教育費の経常支出に対する割合は、大正六年度が三八・四パーセント、大正十四、十五年度がそれぞれ五八・九パーセントと、村費に対する割合が大きくなっている。

つぎに旧矢吹町の町費のうち小学校費に占める教員給料の割合をみると第74表のように約七割を占めており、教育費から教員の給料を差引くと、学校経営費用はいくらも残らない。各町村にとって教員の給料が大きな負担になっているのがよくわかる。

大正七年（一九一八）頃から米価が急に高くなり、各地に米騒動が起るなど、物価もあがってきた。臨時教育会議で小学校教員の俸給を国と市町村が半分ずつ負担するという国庫負担法を答申したことを受けて、大正七年三月十九日市町村義務教育費国庫負担法が成立した。これに関連して小学校令施行規則の改正があり、小学校教員の俸給が増額された。（多くて一〇円、少なくて二、三円）その後物価があがる一方なので、大正九年二月四日「小学校教員臨時手当並旅費支給ニ関スル規則」（県令）が公布され、臨時手当を支給することになった。（俸給五五円以下のものはその七割、但し本俸九〇円をこえることができない。俸給五五円以上六〇円未満のものは本俸と合わせて九〇円に達する金額、六〇円以上のものは五割の臨時手当を支給する。旅費も定額の五割増。）続いて大正九年八月二十日には教員俸給の大巾値上げを指示、同九月十一日には本俸に臨時手当七割を加算したものを基本として俸給を改正する県令を公布した。（「小学校教員ノ進退職

第73表　大正期、旧矢吹町の経常支出総額と教育費の移りかわり

年度	経常歳出総額（A）	同　教育費（B）	教育費の歳出総額に対する割合（B÷A）
	円	円	%
明治四五	六、三三五・一五四	二、四三六・五六五	三八・一
大正元	五、八三六・五六八	二、四一七・八四七	四一・四
大正二	六、三三五・五四六	二、六〇三・六二〇	四〇・九
三	六、六〇七・二五〇	二、六三七・三〇〇	四〇・〇
四	七、〇〇七・三五〇	三、四八〇・八一〇	四九・四
五	七、二〇〇・七一〇	三、四四七・八二八	四七・九
六	九、七七七・四八五	四、九六五・八七五	五一・二
七	一三、六三五・六〇〇	六、七六一・三七〇	四九・四
八	三二、一八五・五六〇	八、五二六・七一〇	三八・四
九	二二、六三八・一五〇	九、三三一・七三〇	四三・一
一〇	二四、七三三・五四〇	一一、〇七二・七〇〇	四四・八
一一	三〇、三一八・六一〇	一一、六〇二・二一〇	五七・四
一二	三〇、九四四・八〇〇	一二、九〇一・七五〇	六一・六
一三	二二、三一九・七一〇	一三、一〇〇・一八〇	六二・四
一四	二三、九六一・八四〇	一五、一八二・六七〇	六三・四
大正一五	二二七、八三三・八七三	一一〇、四三九・二七五	五〇・七
昭和元			
総計			

第74表　大正期、旧矢吹町経常小学校教育費と教員給料の移りかわり

年度	経常小学校費（A）	同　教員給料（B）	教員給料の経常小学校費に対する割合（B÷A）
	円	円	%
明治四五	二、三九七・五一〇	一、七三六・二一〇	七二・〇
大正元	二、三九〇・三三	一、七四〇・一〇〇	七二・〇
大正二	二、五三四・〇四〇	一、七九九・五六〇	六九・九
三	二、六〇八・二一〇	一、七三六・〇〇〇	六七・二
四	三、四〇七・八〇〇	二、一八五・四四〇	六六・一
五	三、二四四・六〇五	二、二四二・四二〇	六六・三
六	四、八二・八七一	二、九八〇・八〇〇	六一・二
七	六、六八一・六九〇	二、九三四・一四〇	四三・九
八	八、三七〇・九五〇	五、七三二・三一〇	六三・〇
九	九、一五〇・三八〇	六、八〇五・五六〇	七二・二
一〇	一〇、三七一・六五〇	六、九五八・四九〇	七二・二
一一	一〇、八三八・九九〇	七、八三九・三五〇	七二・四
一二	一一、〇八八・三五〇	八、六四五・〇四〇	七一・八
一三	一二、八一〇・八八〇	九、四〇六・六六〇	七三・四
一四	一四、七一〇・〇四〇	九、八三七・〇三〇	六六・九
大正一五	一〇六、五九六・七二七	七二、二三二・一一〇	六七・七
昭和元			
総計			

第75表　大正期福島県小学校教員俸給教月額一覧表

年度	本科正教員 男	本科正教員 女	尋常科正教員 男	尋常科正教員 女
	円	円	円	円
大正五	二一・九四	一六・四五	一六・八〇	一三・四〇
六	二一・七八	一五・二一	一八・六四	一三・五〇
七	二九・一七	一八・六六	二四・〇八	一三・一一
八	三三・四九	二三・二九	二七・一七	一八・六三
九	五七・五五	四・三六	四七・一二	三三・九六
一〇	六〇・〇二	四三・〇五	四九・一九	三三・八六
一一	六二・三〇	四四・〇八	四九・〇九	三四・七三
一二	六五・四七	四四・九七	四八・八七	三五・二〇
一三	六七・三三	四五・六六	四九・三三	三三・一六

第76表　大正期、旧矢吹町小学校教員給料と義務教育費国庫負担金交付金の移りかわり

年度	小学校教員給料（A）	義務教育費国庫負担金の教員給料に対する交付金（B）	国庫負担金の教員給料に対する割合（B÷A）	備考
	円	円	%	
大正七	二、九八〇・〇〇	四八二・九一	一六・二	○大正七、三、九国庫負担法成立（一、〇〇〇万円）
八	二、九二四・一四	五六三・二九	一九・二	○大正九、三、四小学校教員に臨時手当（七割手当を骨子とする）旅費（五割増）支給
九	五、二七二・三二	五六六・一六	一〇・七	○八、三〇教員俸給の大巾値上げを指示
一〇	六、六〇五・五六	五九二・四五	九・〇	○九、二臨時手当七割を加算して俸給を改正
一一	六、九五八・四九	五〇二・四四	七・二	○大正一二、三、六国庫負担金増額（四、〇〇〇万円）
一二	七、八五九・七七	二、二四三・九五	二八・六	
一三	八、六四五・〇五	三、〇七七・六六	三五・六	○大一五、三、三国庫負担金増額（七、〇〇〇万円）
一四	九、四〇六・六〇	二、四二八・六七	二五・八	
大正一五 昭和元	九、八三七・〇五	四、三九七・九五	四四・七	

務服務諸給与及代用教員ニ関スル規則」）その結果小学校教員の俸給は大巾に引上げられたが、いま福島県小学校教員俸給月額の平均をみると第75表のようになる。

大正十二年三月二十八日、市町村義務教育費国庫負担法改正案が国会を通過し、国庫負担金が今までの一、〇〇〇万円から四、〇〇〇万円に増額した。さらに大正十五年三月には同法の再改正によって国庫負担金が七、〇〇〇万円に引上げられた。このように国庫負担金はかなり増額されたが、第76表に見る通り国庫が半額負担とまではいかなかった。しかし国庫負担額が小学校教員俸給の一〇パーセント前後から五〇パーセントに近い額まで増額されたので、各市町村の負担がそれだけ軽くなったわけである。しかし各町村とも就学児童が年ごとに増加し、校舎の増改築や新築が行われたので、教

第77表　大正期中畑、三神、矢吹各小学校児童数の移りかわりと建築状況

年度	中畑小学校	三神小学校	矢吹小学校	建築状況
明治四五	二五一人	三〇人	三九人	○大正二、三校舎二階建増築（矢吹）
大正元	二六五	三八	三六〇	○二、三新校舎落成式（中畑）
大正二	二三三	三九	三七	
三	二三一	三三	三七〇	
四	(二四一)	三三	四二三	
五	二二八	三七	四三一	
六	二二八	三〇	四四一	○10奉安庫（中畑）
七	二四八	三九	四六九	
八	二三一	三四	四六二	
九	二二六	二四一	四六二	○二、三奉安庫（矢吹）
一〇	二六五	二四八	四八九	
一一	二六五	二五八	五〇七	○六下庭に校舎増築（矢吹） ○二、三二教室増築（中畑）
一二	二六二	二九一	五四五	○九、二三階校舎増築（三神）
一三	二九八	二九〇	五五九	
大正一四	二九二	二九九	五五七	○四増築（矢吹）
昭和元	四二四	四〇五	五六八	○二講堂新築（矢吹）

（　）は推定児童数　（『矢吹町史』第四巻による）

奨励したが、県でも明治三十二年、徴兵検査の時の学力検査の結果、「義務教育以上の学力あるもの四七・五パーセント、わずかに文章を読むことのできるもの四二・三パーセント、無学のもの一〇・二パーセント」と無学のものが一〇人に一人の割合にいたので、明治三十三年十一月、訓令を出して夜学会を奨励している。

これよりさき明治二十六年十一月、国では「実業補習学校規程」を公布し、義務教育を終えた児童に補習教育をする勤労青少年の教育機関をつくることを奨励したが、（修業年限三年以内）明治三十七年十一月十一日に、夜学会を実業補習学校に変更することを奨励した「実業補習学校設置廃止等ニ関スル規程」を公布した。各市町村で夜学会を廃して補習学育費の負担はそう軽くならなかった。いま大正期の中畑・三神・矢吹各小学校の児童数と学校建築の状況をみてみよう。（第77表）

補習学校と青年団

義務教育六カ年の尋常小学校を卒業した児童の多くは高等科に入学する。高等科を出ると実社会に入る。中学校に入学して上の学校に進む生徒は数えるほどしかいない。このようにして青少年達は満二〇歳の徴兵検査の時の学力調査にそなえて夜学に通って勉強の補習をする。徴兵検査が終ると一人前の男になるということになる。

明治三十二年（一八九九）十一月、国では徴兵検査の時無学の者を出さないように夜学会を

校を設置するようになったのはこの時からであった。しかし教育の内容が十分でなかったので、大正五年（一九一六）十一月三日、県で「実業補習学校施設要項並準則」を公布した。この準則には、健全な国民精神を涵養する「修身」を必須科目とし、「高学年男子ノ為メ軍人ヘノ勅諭読方其ノ他ノ入営ニ必要ナ事項ヲ授ケ」と徴兵検査の準備としての富国強兵の教育を重視しているのが目につく。また公民科を設け、「自治ノ公民トシテ必要トナル事項ヲ授クベシ」実業科目では「其ノ地方ニ於ケル産業、生活ノ状況及一般社会ノ趨勢等ヲ精査シテ之ヲ撰択シ」「成ルベク実習地ヲ設」けるとしている。

ここで中畑、三神、矢吹各補習学校の移りかわりを調べてみよう。

(1)旧矢吹町　明治三十八年二月十日、矢吹町立農業補習学校創立。（十二月十五日から翌年三月十四日まで三か月間授業、修業年限二か年、第一期、第二期及補習科の三組）

大正五年四月　女子部附設

大正六年　矢吹実業補習学校と改称。（予科一・二学年、本科一・二年、引続き三・四・五年と徴兵検査まで）

大正十二年　矢吹農業補習学校と改称。（前期、後期、研究科）

(2)三神村　明治四十一年一月十七日三神村立農業補習学校創立

大正三年五月十一日三神実業補習学校と改称

大正六年一月三域目（景政寺）須乗（松谷光蔵宅）明新（三神小学校明新季節分教場）に分校をおく

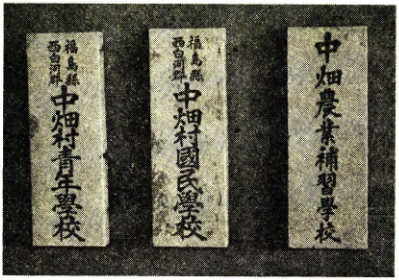
大正十二年一月分校を廃止

大正十三年七月三神農業補習学校と改称

(3)中畑村　明治四十一年十二月一日中畑村立農業補習学校創立

大正六年四月一日中畑実業補習学校と改称

大正十二年五月一日中畑農業補習学校と改称



門柱標札

このように国では補習学校の教育を重視してきたが、大正十五年七月一日、補

習学校と併行して青年訓練所の設置をみた。各町村の設置状況はつぎの通りである。

中畑青年訓練所　大正十五年六月三十日設置許可　昭和二年一月一八名が入所

三神青年訓練所　大正十五年六月十六日設置許可　同七月一日開所

矢吹青年訓練所　大正十五年七月一日開設　七月十九日開所式

このように開所した青年訓練所は「青年ノ心身ヲ鍛練シテ国民タルノ資質ヲ向上」するために設置され、修業年限四か年、修身及公民科（年間二五時）、教練（年間一〇〇時）、普通科（国語・数学・歴史・地理・理科合わせて年間五〇時）で、教練（軍事教練）を主眼とした訓練所である。この青年訓練所と農業補習学校は同じ小学校に併置されていたが、昭和十年七月になって、この二つを合併した形で青年学校の開校となったわけである。

上の学校に進学するものがすくなかったのは、近くに中等学校がなかったからであろう。明治時代には県立安積中学校（明治三十四年四月より郡山）・私立石川中学校（石川、明治四十年開校）・西白河郡立農学校（白河、明治四十一年開校、大正十年県立となる）の三校であった。大正時代になるとつぎつぎに中等学校が開校したので、今までより中等学校に進む生徒が増えてきた。

大正三年五月　白河町立白河実科女学校創立（大正九年郡立、大正十二年県立となる。）

大正八年六月一日　須賀川女子技芸学校は須賀川実科女学校と改称、須賀川商業補習学校は須賀川商業学校と改称

大正十一年三月　県立白河農学校が須賀川に移転し、岩瀬農学校となる。

大正十一年六月　県立白河中学校開校

大正十三年七月　白河に私立白陽女学校開校

三神小学校の郷土誌をみると、三神小学校から上の学校に進学した者は昭和八年までの間つぎの通りで、決して多い方ではなかったようである。

一、師範学校入学者一四人　卒業者一三人

二、中学校入学者六二人　卒業者四八人
三、高等女学校入学者一〇人　卒業者七人
四、実業学校入学者五人　卒業者四人
五、大学、専門学校、士官学校入学者一〇人　卒業者一〇人

（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―四八三）。

明治時代に学校以外の教育の通俗教育は、大正十年六月、文部省の普通学務局の中に社会教育課ができ、この時から通俗教育は社会教育と呼ばれるようになった。これにより県に社会教育を担当する専任の職員が設置され、社会教育が重視されるようになった。明治維新前からあった若者の組は、明治時代になっても引続き残っていたが、やがて部落の青年達の集まりである青年会が、部落内にできるようになった。明治四十一年二月十五日、矢吹青年会が発足した。これは今まで部落ごとにあった青年の集まりをまとめたもので、「青年ノ知徳ヲ研修シ地方ノ弊風ヲ改良スル」を目的として、大字矢吹（六〇名）・中畑新田（一七名）・大和久（一八名）に支部をおき、会長は町長、副会長は小学校長であった。これが大正五年一月に「青年団規則標準」の訓令が出たので、同年十一月一日、今までの青年会が矢吹青年団として新しく発足した。矢吹青年団にはつぎの分団をおいた。

第一区分団（大字矢吹上（かみ）組）　矢吹第二区分団（矢吹下（しも）組）　中畑新田分団　大和久分団　東開墾分団（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―五七七）。

大正九年六月十六日、県は処女会規則標準を制定したが、この年の七月三十日、矢吹処女会ができた。「会員ノ知能ヲ研キ徳性ノ涵養ニツトメ」る目的で発足した本会は、児童洋服、裁縫の講習会や毛糸編物講習会をはじめ、小学校の運動会に売店を開いてその益金を会の事業資金にあてるなどの事業を行った。また大正十四年四月より数ヵ月に亘って町内有志より寄附をあおぎ、書籍二〇〇冊が集まったので、処女会文庫を開設し、処女会員や補習学校女生徒の閲覧者が多かった。処女会は昭和二年五月八日、矢吹女子青年団となり、引続いて事業を行っていた（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―五七八・五七九）。

中畑村に青年学友会ができたのは明治三十年十二月三十一日である。この会は中畑小学校を卒業した者の集まりで「会員相互ノ智徳ヲ研磨シ情誼ヲ厚クシ永ク中畑小学校ノ教恩ヲ忘レ」ないことを目的とした同窓会のような会で、明治三十

一年四月の会員は四三名であった。この会は明治三十一年二月、幻灯機を購入し各部落で幻灯会を開催し、どこの会場でも盛会であった。中畑村に青年会ができたのは明治四十年十一月二十日で、青年智徳の修養、体育の奨励、品位の改善をその目的とし、早起、夜ふかししない、喫煙飲酒の節制、勤倹貯蓄、夜警、時間の厳守などを実行することを決めている（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―五八〇・五八一）。

一方大正十一年中畑村に処女会が発足し、昭和三年四月二十二日女子青年団と改称している。

三神村にも青年団、処女会があった。（大正七年三月に村費から青年団に一五円の補助金が出ており、大正十年三月にも三五円の補助金が出ている。）とくに明新青年会が大正元年十一月、明新の三神小学校季節分教場に私立明新図書館を開設した。大正七年度の閲覧者六三〇名（一日平均一・七名）経費二万円で蔵書二〇七冊、大正十三年度の閲覧者四五三名（一日平均一・九名）、大正十四年度の経費一万五、〇〇〇円、蔵書四五三冊であった（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―五九九）。

みどりクラブ

ヨーロッパやアメリカの教育思想や教育の方法は、明治時代から日本の教育学者がつぎつぎに発表してきたので、これらの方法に共鳴する人が多くなってきた。明治二十二年（一八八九）帝国大学に特約生教育学科が設けられ、ドイツ人ハウスクネヒトによってヘルバルト派の教育学が伝えられた。ここで学んだ人たちによってこの教育学が日本各地に流行し、約一〇年間に亘って全盛をきわめたことがあった。この教育学は徳性の涵養を教育の目的とし、子どもの興味をもとにして教育の方法を組立て、とくに教える順序（過程）を直観から概念へと進める方法を五つの段階で表わした（五段階教授法という）ので、非常にわかりやすく広く行われるようになった。このほか社会的教育学、実験教育学などいろいろな教育学説が日本に入ってきた。明治四十三年五月十三日、釜子小学校でX（エックス）放散線の実験を児童にみせ、大正四年（一九一五）十月四日、信夫小学校で無線電信の実験を三年生以上の希望者に一人一銭ずつとって見せているが、これらは実験教育学が我が国に広まってきた一つの例であろう。

大正時代になると新しい教育学説がどんどんわが国に入ってきたが、第一次世界大戦後になると、一般の自由主義、民主主義の思想が活発になってきた事情を背景にして、自由主義的、児童中心主義的な教育思想が教育界に流れ込んでき

た。そうしてこのような新しい教育法を試験的に行う学校や、新しく私立の学校をつくって新教育を行う教師が現われてきた。大正十年八月一日から一〇日間に亘り、日本の新教育論者八人を一堂に集めて、八大教育主張講演会が開かれて大盛況であった。この時八人の講演者と演題はつぎの通りであった。

樋口長市「自学教育論」　河野清丸「自動教育論」　手塚岸衛「自由教育論」　千葉命吉「一切衝動皆満足論」　稲毛金七「創造教育論」　及川平治「動的教育論」　小原国芳「全人教育論」　片山伸「文芸教育論」

これら八人の教育論には自由や創造性を尊び、子どもの自由・活動・個性・創造性・自主的学習などを強調する児童中心主義的傾向をもっている点では共通性があった。つまりわが国の明治以来の主知的注入的教育（知識を無理に教え込むつめこみ教育）、教師中心の教育に対し、児童中心の新教育論であり、自由教育論でもあった。

この頃白河町に新しい教育を吸収しようと、若い教員の集まり「みどりクラブ」が誕生した。誕生したのは大正十三年頃であったが、この時のメンバーの一人星正治訓導（白河第一小学校）は当時の「みどりクラブ」の活動についてつぎのように回想している。「白河みどりクラブは白河第一小学校から第三小学校までの若い先生方でつくった新教育の研究実践を目ざした自主的な研究団体である。……たまたま郡教育会主催の研究会や講習会があってりっぱな講師先生がお見えになられても、若い先生方は遠くからお話を聞くだけで、講師先生にお目にかかって直接指導を受けることはできなかった。新しい教育についてあこがれをもちながら悩みを解決するすべがなかった。……白河第二小学校、第三小学校の若い先生方に、自分たちでお金を出し合って講師先生をよんで聞こうではないかとよびかけたら、急速に話がまとまって、三〇人の会員で毎月五〇銭ずつ積立てることにした。九〇円あれば当時東京から一流の講師を招くことができた。……早速白河みどりクラブを結成して毎週土曜日の午後、学校輪番に集まって、手近な教育問題について教育座談会を開きながら実践活動をつづけた。……いよいよ金もたまってまず児童の村の志垣先生においでいただくことになった。そうして農繁休業を利用して第一回新教育講演会を白河第一小学校講堂で開くことになって一〇〇人ほど集った。一人から一円聴講料をいただいたら、それだけで経費はじゅうぶん。それから毎学期一回位ずつ中央から講師先生を招いて講習会を開いた。

（児童の村の野口援太郎先生、成城学園の小原国芳先生、奈良女高師の秋田喜三郎先生、それに洋行がえりの千葉命吉先生、音楽の佐々木すぐる先生など）……夜は講師先生を囲んで晩さん会を開き、全く膝を交えてのお話もできた。講演で聞けなかった新教育のいろんな問題について話を聞き、疑問を解決していただき、自分達がぐんぐん成長してくる満足さで勉強にはげむことができ、白河の教育は一段と活気づいてきた。……白河三校の子どもの綴り方を集めて「みどり」という文集を発刊したり、夏休みに臨海学校を行ったりした。……みどりクラブの誕生は白河の大正デモクラシー時代、児童中心主義の新教育発展に大きな推進力になったわけだ。」（『明治百年福島県教育回顧録』）

このように大正後期に白河に新教育運動が起ったが、この時の講師の先生はつぎのように日本一流の先生方であった。

○奈良女子高等師範学校附属小学校　大正八年三月から木下竹次が主事となり、自律的学習を基礎にした自由、独創、自彊、歓喜の学習法を目ざし、学校生活全体を学習の場とする生活の学習化を図り、大正九年四月から低学年の合科学習をはじめ、生活修身を主張した。秋田喜三郎はこの研究メンバーの一人である。

○千葉命吉　大正九年広島高等師範学校の主事となり、「一切衝動皆満足」の教育をはじめた。子どもを個々独自の価値あるものとみて、その子どもの欲する所を伸ばすことに徹底しなければならないという、教育の可能性の根源を子どもの内心のはたらきに求めようとしたのが「一切衝動皆満足」で、徹底的な児童中心主義の教育である。

○児童の村小学校　教育の世紀社のメンバーである下中弥三郎、野口援太郎、為藤五郎、志垣寛の四人が大正十三年四月十日、池袋に「児童の村」小学校を開校した。師弟関係、教科目や時間割、教授法などにしばられない徹底的個人自治を目ざし、学校を自由な子どもの生活の場所として自然に親しみ、環境を重視し、個性を尊重し、自発活動を重視した教育をはじめた。教師は児童の生活を記録していくことに専念し、児童は教材、時間割、場所、教師を選ぶ自由を持ち、一学級二〇名以下、六学級以下の小規模で広々とした校庭を持ち、在校時間を規定しない自由進級制を採用し、学校運営は子ども、父兄、教師の自治と共同経営によって運営された。

○成城小学校　大正六年四月四日、成城学校（校長沢柳政太郎）に成城小学校が開校した。この小学校は個性尊重の教育、自然と親しむ教育、心情の教育、科学的研究を基とする教育を目ざして創立し、児童の個性を尊重し、個有の心身発育の過程を重んじ、児童の能力に応じた教育をしようという学校である。小原国芳はこの小学校の主事に迎えられたが、全人教育論（新カント派哲学の影響をうけ、宗教と芸術を根底にした人格の全円的発達を目ざす教育論）をうちたて、昭和四年四月八日、玉川学園を創設した人

である。（玉川学園は全人的視野に立ち、生徒の個性能力に応じた自己発見、自己実現を目ざす労作教育重視の学園）この成城小学校はドルトン・プランを採用し、その普及を図った学校である。

○佐々木すぐる　作家鈴木三重吉が文部省唱歌にあきたらず、子どもの歌ごころを引き出すような芸術的童謡を目ざして、大正七年月に「赤い鳥」を創刊した。そうして大正八年に西条八十の「カナリヤ」（歌をわすれたカナリヤは）北原白秋の「雨」（雨がふり七まま雨がふる）に成田為三作曲の童謡をはじめ、つぎつぎに美しい童謡を発表した。作曲家佐々木すぐるもこの童謡運動に共鳴し、自分で作曲した童謡をひっさげて各地で講習をして廻った。この時使ったテキストをみると、はじめに

「私は従来のいわゆる唱歌なるものにあきたらず、もっと吾々の心持に合う芸術味の豊かなものにしたいと苦心しました結果、ようやく完成発表するの機会を得ました。とくに曲の気分をあらわすことに努めました。一度歌えば永久に忘れられぬ親しみあるメロデーとなって、心の奥深く残ることを確信します。」（大正十三年四月）

とその抱負をのべている。テキストの曲の中には現在もよく歌われている「月の砂漠」（月の砂漠をはるばると　加藤まさを詞）・「青い鳥」（泣きの涙の青い鳥　法月歌客詞）・「落葉」（北風寒き霜のあした）・「ほたる」（ひるま見たときゃどちらを見ても　加藤まさる詞）・「初鶯」（ケキョケキョうぐいすホウホケキョ　富原義徳詞）など美しい朗が含まれている。

以上みどりクラブの講師の横顔をのぞいたが、とにかく日本一流の講師をつぎつぎによんで、新教育を夢中になって吸収したわけで、大正十五年三月十五日の「福島県教育新聞」に、みどりクラブ会員のつぎのようなメッセージがのっているのをみても、当時の意気込みがよみがえってくるようである。

「私はいつも自分の心もちをそのままにあらわす言葉を持ちたいと思っています。」（H生）「せい一ぱい勉めましょう。しっかり歩いて行くところまで。—苦しみぬいたり、もがきぬいたりしたものほどむくいられることが多いのです。」（S生）「みどりのように我等は若い。どこまで伸びても我等は若い。両眼を開いてつねにそなえよ。」（M生）「花も咲かない実も結ばない鉢植のゆずが、小さな葉を一つ持ったまま冬ごもりした。枯れるのか伸びるのか、太陽は微笑している。」（K生）

新教育

大正八年（一九一九）四月二十七日、山本鼎（かなえ）は長野県神川村小学校で児童自由画展覧会を開いて自由画教育を提唱した。山本は今までの図画教育が臨画（手本を見ながら、それを正確に模写する図画）に対し、「子どもを直接自由に自然に「放牧」しなければならない。その時子どもはひとりでに美を解することができる。」

と、子どもらの目と創造性とを基にした写生中心の図画教育を提唱した。この自由画運動は色鉛筆にかわってクレヨンが出現したこともあって、全国にひろまっていった。みどりクラブの一人星正治は、白河第一小学校で自由画教育を推進した。星は当時の教育をつぎのように回想している。

「このごろの指導法は、写生画でよくみること、よくみて美しいと感じたことを、そのまま思いきってかく。……子どもの遊びの中から、また美しいと思ったものの中から、絵にかこうと思うものをつかみ、それを一応まとめてかきはじめるが、かいているうちに自分の絵の中にとけこみ、つぎつぎと発展してかきたしていく。やったことをもとにして生活を創造していくようにも思われる。またこんな表現活動をくり返しているうちに、自分の生活をみなおしたり、考えるようになり、絵の内容も深まり、絵とともに子どもたちの生活がひらけていく。（低学年の思想画）」（『明治百年福島県教育回顧録』）

このような自由画運動はこの地方にどのような影響を与えたのであろうか。大正十二年七月十三日、釜子小学校で星訓導の自由画研究会を開いているから、かなりの共鳴者が出てきたことであろう。また白河のみどりクラブの新教育運動も、この地方にかなりの影響を及ぼしたものであろう。

矢吹小学校の沿革誌をみると、大正四年九月の職員打合せ会で、「朝ノ始業予報及深呼吸ヲ行ハシムベキ件の取調」という議題が提出されている。この深呼吸は大正四年に創設した成蹊小学校で当時実施していた教育の一方法である。成蹊小学校は個性の伸長、自発性の伸展により、自学自習の習慣の確立を教育の目標としており、その方法の一つとして毎朝授業のはじまる前に凝念法として、七時五〇分から二〇分間深呼吸をして心を落ちつかせ、これからはじまる学習に気持を集中させるようにする。深呼吸はその後も〇時五〇分から一〇分間、一時五〇分から二〇分間行っている。矢吹小学校の打合せに出た深呼吸は、この成蹊小学校の方法によるものであると思われる。

つぎに大正十二年（一九二三）から昭和三年（一九二八）まで矢吹小学校に勤務していたK男教員は当時のことをつぎのよに回想している。「最初の一年の校長は和知為助先生で、附属校から校長となって来られた方で、教育的良心の強烈な方でした。当時ダルトンプランの教育法の指導を受けた」（矢吹小学校創立百年記念誌『百年』）。

大正十三年四月二日、ダルトンプランの創始者パーカスト（アメリカ）が日本に来て、東京・仙台などで講演してから、いっそうダルトンプランが全国に広まった。この頃東京の成城小学校を中心にダルトンプランによる授業が行われ、本県でも師範学校附属小学校などでこの教育法がこころみられた。ダルトンプランの基本思想は自由と共働で、全教科を数学・歴史・理科・英語・地理・外国語の主教材と、音楽・美術・手芸・家事・手工・体操を副教材とする。午前中は主教材を各教科別の実験室とよばれる部屋で三時間、生徒が各自個別に自学自習し、教科別担任教師のアドバイスを受ける。午後は一せいに副教材の学習がある。学習は能力差に応じて高・中・低の三つの水準のものを用意される。生徒は自分の進度を確認し、自分で評価し、教師にも知らせてグラフに記入する。このように午前中の主教材の学習は個別学習、能力別指導自主的学習である。

大正十四年に中畑小学校を卒業したG男生は当時の小学校の思い出「昔がたり」の中でつぎのように言っている。「〈山田信先生は〉学校でも新しい教え方を実践され、四人ずつ机を並べて、男も女もまじえた四人一組のグループにわけた学習など、ことに先生は新しい童謡を私達にうたわせました。草川信（？）の新しい童謡に私達の胸ははずんだものでした。……又山田先生を語る場合、野球のことにふれない訳にはいかない。山田先生は野球も熱心で、学習も熱心で、県下に野球中畑の名をとどろかせました」（中畑小学校創立百年記念誌「百年のあゆみ」）。

この文中にあるグループ学習は、当時本県師範学校附属小学校で研究していた「分団式教授」によるものか、あるいは大正元年十二月二十日明石女子師範学校附属小学校で発表した及川平治主事の「分団式動的教育法」（子どもを主体とし、個性を尊重し、生活経験に基づく教育）によるものであろうか。どちらにしても新教育に基づく教育の一方法である。また草川信の童謡を歌ったとあるが、作曲家草川信は「赤い鳥」童謡運動の熱心なグループの一人で、その作曲した童謡「風」（誰が風を見たでしょう　西条八十詞）「夕焼小焼」（夕焼小焼で日が暮れて　中村雨紅詞）「ゆりかごのうた」（ゆりかごのうたをカナリヤが歌うよ　北原白秋詞）など今でも歌われている童謡を作曲した人である。また山田先生といえば、大正十四年県の少年野球大会に出場した中畑小学校は、決勝戦で福島第一小学校を五対四で破って優勝し、野球中畑

の名をあげたことを忘れることができない。

このような新しい教育は若い教員達の心をゆり動かしたが、実際の授業に取り入れようと試みたのは、研究熱心な特定の教員に限られ、教科書を教え込まなければならない教師中心主義、つみ込み主義の教育に割り込むすきがなかった。しかし福島県師範学校附属小学校では、大正十二年度の綱領の第一に「児童の自発的活動を重んじ、独立自主の精神を涵養すること　創作工夫の能力を伸長し現代文化に参与せしむること」（福島県師範学校附属小学校）「児童の自発活動を尊重し、個性の発揮につとめ、以て創造力の伸展を図る」（福島県女子師範学校附属小学校）。

といち早く児童中心主義の教育法を取り入れたので、県下の各小学校もきそって児童の自発活動を重んじて能力を伸ばす教育を授業にとり入れるようになったのは昭和時代になってからである。

（石井　亘）

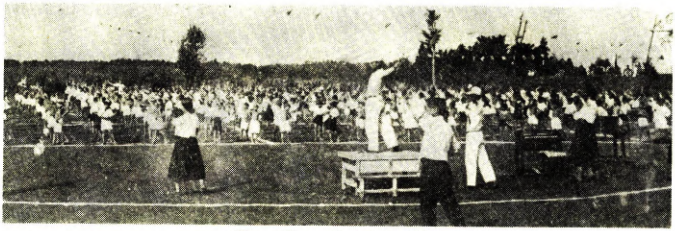
三　戦時体制下の教育

(一)　昭和初期の教育

教授から指導へ

大正時代に入ってきた外国の教育思潮が、わが国の教育に取り入れられてきたが、昭和時代になると、ようやくその教育思潮や教育の方法を自分のものとして消化して、教育内容を深めようとする教員が多くなってきた。

第一に授業に必要な機械器具をとりそろえるようになってきた。理科実験用の器具や体操道具やピアノ・オルガンなどの楽器をそなえ付け、教室からはオルガンに合わせて子どもらの歌がきこえ、校庭には肋木（ろくぼく）・平行棒・砂場に鉄棒と運動具が並び、理科の実験に子どもらは目を輝かせているといった風であった。



運　動　会（三神小学校）

第二に子供たちが授業に使う道具が良くなってきた。例えば当時小学校の一、二年生がよくノートのかわりに石板（せきばん）に石棒で数字や文字や絵をかいていたが、その石板の片側にいつのまにかそろばん玉を取りつけたかんたんな計数器がつくようになった。色鉛筆にかわってクレヨンやパステルなどが売り出され、子どもらは自由に、伸び伸びと、思い切り子供らしい絵を画くようになった。

第三には教師の教え方が、教授から指導にかわってきた。「読み書きそろばん」時代の教師は、子供らに教えるという考えが強かったが、外国から教育思潮が入ってくると、教師はただ教えるのではなく、子どもの能力を引き出すように導くことが大切で、つまり教え導くのであるということで、教え方をいろいろくふうするようになってきた。国語の時間に漢字の書き取りを何度もくり返し書かせるというだけでなく、若い教師達は見たまま、思ったままを書く綴り方に情勢を燃やすなど、自由教育を主流として、児童の個性を伸ばそうとする教師が多くなってきた。

運　動　会　昭和六年四月、三神小学校に転任して来た教師円谷幸雄氏は「当時の教育は知、徳、体育を教育理念としていたが、とくに体育に力を入れていた。」と回想している（あゆみ）。

その当時中畑・三神・矢吹の各小学校共、毎年開かれている矢吹班の連合体育大会の優勝を目ざして技を競い、そればかりでなく白河中学校・石川中学校・岩瀬農学校の運動会に招待する小学校のリレー競走に出場して、優勝旗を手に入れようとがんばっていた。矢吹小学校の運動会は春四月であったので、桜の花びらが風に舞い散る下で開かれたが、三神小学校では校庭が狭かったので、毎年秋の運動会は七久保原で実施した。円

谷幸雄氏は、「運動会は学校行事の内でも大きなものであっただけに、その運営は困難をきたし、殊に当時の運動会は村祭（十月十七日）のサッペ、即ち後祭の日に実施することにきまっていたので、朝霜が降りて（つめたさに）ふるえ上る季節で、机、腰掛の運搬など、全部先生と生徒で実施したので、ある時は運動会終了後雨となり、夜になって松山伝いの道形になった根の起伏する中を、提灯をつけて荷車を引いて、先生方がずぶぬれで運んだこと、今に忘れ得ぬ思い出の一つであります」（あゆみ）。

と会場が離れていたためにつらかった運動会を思い出している。しかし昭和十二年現在この地に校舎を建て、広い校庭もできたので、そのつらさは解消された。

小学生の服装　昭和のはじめに生徒であった矢吹小学校の卒業生は、当時の服装や学校のようすをつぎのように書いている。

「着物の袖で鼻を拭き、その個所は光沢を出す。木綿の棒縞のモンペからコール天のモンペになってその暖かさを知り、藁靴からゴム長になって、水のしみ通らぬことを知り、……帽子はなるべく大きいのを買い、卒業まで間に合うようにする。足の爪はなるべく短かく切らないと、足袋が早く破ける。習字の時は新聞紙に古い筆を使って練習をする。無欠席で習字の手本を頂き、国語読本は「賞」の印のついたものをなるべくもらうように……。」（昭和三年卒業S生）

「生徒もほとんど男女共着物が多く、修身、読本、算術など少ない教科書と筆箱に鉛筆をガッタガッタならしながら、小さい風呂敷に包んで肩にしょって通学した。肩からかけるカバンを持っているのはハイカラな方だった。たまたま東京から転校して来た兄妹が、洋服にランドセルをしょって登校して来た時には皆珍しく、あとをつけて歩いたりした。」（昭和二年卒業N子）

「小生が入学した頃の校舎の窓は、全部障子であり、冬の暖房は炭の火鉢一つで交替で暖をとったものである。」（昭和五年卒業T生）

「この四月から（高等科の）授業料を一円ずつ納入したものです。当時の一円というと、私が高等科二か年を通して新聞配達を六五軒くらいしたが、一か月二円という給料でしたから、全く高い授業料だったのです」（昭和三年卒業T生「矢吹小学校創立百年記念誌百年」）。

教育時報　矢吹小学校では昭和三年（一九二八）十月十五日、謄写刷りの「教育時報」を創刊、（つぎの号からは活版印刷になる。）各保護者に配布した。これは学校と家庭との連絡をよくするため、学校や町の

ようすを保護者に知らせるものであった。いまその内容の一部をあげてみよう。

○創刊号　御大典記念貯金（貯金日は毎月十日と二十五日の二回）御大典記念植樹に有志の寄附を希望
○第二号（十一月一日発行）十月十九日矢吹小学校で第四区小学校競技会が開催されて、三神小学校が優勝
○第三号（十二月一日）大木代吉氏が矢吹小学校に、御大典記念として堅型山葉ピアノ一台（一、一〇〇円）連弾用椅子等附属一式（一四一円）寄贈
○第四号（昭和四年一月一日）仲西保蔵、岡部喜四郎、藤田義太郎がラジオ、アンテナを寄贈
○第六号（三月一日）少年赤十字団が巣箱一〇〇個設置（二月二十五日）
○第九号（六月一日）通学団編成（八班）
○第二六号（昭和五年十一月一日）教育勅語煥発四〇周年記念事業
○第二七号（十二月一日）大和久通学団が初茸狩り、しの切りをして充電機を寄贈

矢吹少年赤十字団は昭和三年七月五日発団式をおこない、団員は五年以上、七月十七日公楽館で社会教化の活動写真、昭和四年九月には県内県外の少年赤十字団の成績品展覧会、同年十一月町内三〇ヵ所に示道標を立てるなど、活発な活動をした。このような少年団はどこの学校でも結成されたが、中畑小学校では昭和七年九月四日少年防火団が結成された。そうして同九年二月十一日原宿部落の火事の際活躍して、矢吹警察署から表彰されている。

青年訓練所

当時の小学校には農業補習学校や青年訓練所が併設されていて、小学校教師が兼務し、また青年団も小学校で世話をしており、小学校は社会教育の母胎となって働きかけていた。

三神農業補習学期は年々十二月より翌年三月まで夜間授業をする、通称夜学であるが、大正十三年（一九二四）七月三神実業補習学校と改称。昭和四年四月規則改正によって、三神実業公民学校と改称し、女子部を新設し、通年制（年間通して授業する）になった。

三神青年訓練所は大正十五年（一九二六）六月十六日設立許可、昭和二年一月入所式があった。青年訓練所は勅令によって全国の市町村に設置され、青年の身心鍛錬と、国民の資質向上を目的とした。訓練科目は修身及公民科、教練、普通学科（国語・数学・歴史・地理・理科）職業科（農業・商業）で四年制、高等科を卒業して家事についている者を対称に

青年訓練所査閲後の写真（本町　横川清蔵）

している。授業は修身公民科と教練が午後一時から四時半まで、普通科と職業科は午後七時より二時間、一年間に教練は四〇日で一〇〇時間、普通科は二五日で五〇時間、修身公民科、職業科は二五日で二五時間となっていた。

中畑農業補習学校は昭和三年十二月一日に女子部を開設、同四年十月十一日中畑実業公民学校と改称した。中畑青年訓練所は大正十五年七月一日中畑実業公民学校に附設、昭和二年一月入所式をおこなったが、入所者は一八名であった。

明治三十八年二月開校した矢吹町補習学校は、大正十二年農業補習学校、昭和四年矢吹実業公民学校と改称した。矢吹青年訓練所は三神や中畑の場合と同じく、大正十五年七月一日開設、昭和二年一月から授業をはじめた。授業は毎月の休業日と農閑期とを利用して実施、教練科は小学校教員と在郷軍人の中から委嘱した各五名の指導員がこれに当った。毎年福島連隊区司令官の査閲があるので、指導員の訓練はきびしかった。

青　年　団

矢吹青年会は明治四十一年二月十五日結成し、大正五年十一月一日矢吹町青年団となった。青年団は五つの分団に分かれてそれぞれ活発な活動をしていたが、昭和五年の矢吹町青年団の綱領は、

一、常に神を敬ひ皇室を尊び祖先を崇め奉ること。
二、学術技芸を修めて心身の鍛錬に努めること。
三、奢侈の風を斥けて生活を簡素にすること。
四、時間を尊び仕事の能率を挙げること。

五、家庭内職の普及を促して国産品を愛用すること。
六、飲酒、喫煙の習慣打破に努力すること。
となっている。

大正九年七月三十日矢吹町処女会が設立し、会員の知能を研き、徳性の涵養につとめるため、毎年修養会や講習会を開いてきた。大正十四年四月より町内有志より図書の寄附を募集して、二〇〇冊の図書が集まったので、処女会文庫をつくって閲覧するなど、目ざましい活動をした。昭和二年五月八日矢吹町女子青年団と改称し、昭和四年四月一日現在の会員数は一四四名であった。中畑村処女会は大正十一年発足し、昭和三年四月二十二日中畑村女子青年団となった。

当時三神小学校長であり、青年団の団長であった渡辺欣吾氏は

「三神村青年団はよく統一せられ、補習教育に精進し、（補習学校に入学をすすめた）体育の向上に努め、村内の各行事を励行するなど、優秀なる成績をあげつつあることを認められ、昭和五年文部大臣から表彰の栄誉を得ることが出来た。」

と当時のことを回想している（『あゆみ』）。

校舎建築

校舎の建築、改築は昭和時代になっても引続きおこなわれているが、とくに講堂の建築が目立って多くなってきた。

矢吹小学校は大正十五年十一月十一日講堂を新築した。児童数が年毎に増え、また校舎も老朽化してきた。また教室の間取りが悪く、採光も良くないので、昭和三年十二月二十七日の町議会で小学校の増築が万場一致で可決した。それで学校の敷地に隣り合っている畑地四反四畝歩を買収して講堂を西方部に東向きに移し、今までの西に二階建の校舎と便所を増築した（昭和四年八月）。

中畑小学校は昭和四年四月二十二日講堂（九〇坪）を新築し、二階建の新校舎四教室の増築落成式をおこない、併せて東旧便所と校長住宅を移転した。三神小学校は明治四十四年一月九日三城目寺隠と神田東原地番にまたがる丘の上に建て

た校舎を使用していた。しかし児童数が年々増えるので大正十二年に五教室を増築した。また校庭が狭いので運動会は七久保原まで行って開催するという不便をしのんできた。しかし児童数の増加のため、またまた増築を迫られたので、御料地を借用して昭和九年十一月二十日、ようやく二階建六教室増築の落成をみた。

教　育　費

大正十五年（一九二六）九月下旬、株式・生糸・綿糸相場が暴落し、昭和二年三月京浜地方に銀行の取付がおこり、休業する銀行が相つぎ、金融恐慌がはじまり、福島でも福島銀行が休業（二月二十八日）、昭和三年には貿易収支の赤字が増え、福島県内の銀行がつぎつぎに休業破産、昭和四年十月ニューヨーク株式市況が大暴落し世界恐慌がはじまった。このあおりでわが国の生糸の価格が崩落し、この年は大凶作。昭和五年になると世界恐慌が日本に押し寄せてきたので物価がさがり、昭和七年頃まで経済界の不況が続いた。このため養蚕・製糸業者は大打撃を受け、昭和六年までに県内の銀行の破綻は二二銀行にも及んだ。この年満州事変が起り、東北地方は冷害や凶作で、農村の不況は深刻化してきた。

このような不況の続く中で、各町村は健全財政のたてまえから極端に切りつめた緊縮予算を組んで、この不況を乗り切ろうとした。このため教育費も切りつめを余儀なくされた。

たとえば矢吹町の教育予算をみると、直接児童の指導に当てられる需要費が、昭和四年度二、〇五七円が、同五年度には一、五九四円に減額、三神村の昭和四年度予算の需要費一、六〇六円が、同五年度には一、〇一六円（決算は八〇八円九〇銭）、同六年度は七九六円（決算は六四二円三二銭）と大幅に落ち込んでいる。

この結果、教員の俸給未払の町村が各地におこり、昭和六年十月全国の俸給未払町村が六八七あり、さらに増える傾向にあり（『近代日本綜合年表』）、福島県で昭和十年に俸給未払町村が一五九にものぼった（最高六ヵ月）。また貧困家庭の児童に学校給食を実施して、（三神小学校など）窮民救済の一助としたりしていたが、このような状態ではせっかく教育の指導法が改善され、その教育内容を充実しようとしても、なかなか思うような効果はあがらなかった（第三章一を参照）。

国家主義

昭和初期にせっかく教育内容を目ざしていた小学校教育も、昭和六年（一九三一）九月十八日満州事変が起り、同七年一月上海事変、三月には満州国建国と、国際問題も一応の落つきをみせようとした。しかし昭和八年国際連盟脱退と国際問題はあやしくなる一方、農村ではたびたびの凶作に見舞われ、米と繭を中心とする農作物の価格は、昭和五年の大暴落以来なかなか回復しなかった。そればかりでなく昭和九年には繭価がまたまた下って終った。このような時文部省は大正十五年四月、小学校の日本歴史の教科書を国史と改め、昭和四年九月、文部省は国体観念明徴、国民精神作興のため教化動員を実施し、その旨を各学校に訓令した。同七年十二月文部省は児童生徒への校外指導、生活指導の健全化を指示し、同九年四月には全国連合小学校教員会が全国代表三万五、〇〇〇余人を集め、宮城前で全国小学校教員精神作興大会を開催し、天皇が臨席して勅語を賜った。

このようにして国家主義・軍国主義が教育の中に入り込んでくるようになってきた。福島県小学校長会は毎年大会を開き、県からの指示事項が発表されたが、その頃の指示事項をみると

昭和二年　教授の徹底を期すること。個人差教育を重視すること。

からしだいに国家主義へ傾いて行き、

昭和三年　国体観念を明徴ならしむる件。

昭和七年　風紀改善、精神作興に努むること。教授の実蹟向上に努力する事。

昭和八年　愛国精神涵養に努力する事。

と移り変っていった（『福島県教育史』）。

昭和八年四月より小学校教科書の改訂があり、はじめて色刷りの小学国語読本になった。小学校第一学年の最初の頁に「サイタ　サイタ　サクラガ　サイタ」とあるので、サクラ読本といわれる教科書であるが、その一年の読本の中をみると「ススメ　ススメ　ヘイタイ　ススメ」「ヒノマルノハタ　バンザイ　バンザイ」など、国家主義思想を一段と強調する教科書に生まれ変った。

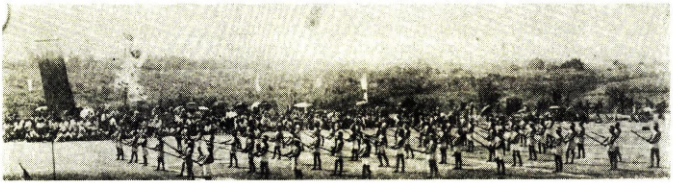
中畑小学校の大正十五年度の努力事項をみると、「学習能度の向上につとめ、実力養成に努める」とあり、国家主義の教育は少しも読み取れない。西白河郡某小学校の昭和七年度の努力事項をみると「児童ノ学力充実ヲ図ル」を最重点の目標にしているのに、昭和十一年度になると、「国体観念ノ明瞭ヲ期スルト共ニ、宗教的情操陶冶ニ努ムルコト。敬礼ヲ正シクスル。国旗、校旗ノ尊重。各級ニオケル勅語奉読、神社仏閣清掃……。」と国家主義を前面に押し出している。

青　年　学　校　昭和十年（一九三五）四月一日、青年学校令が公布され、各町村にあった実業補習学校と青年訓練所が統合して、新しく青年学校をつくることになった。矢吹町・中畑村・三神村にも四月一日青年学校が開校した。青年学校は今までの青年訓練所とちがって義務制になり、修業年限は普通科二年、（尋常科卒業生が入学する）本科男五年、女三年、（高等科卒業生が入学）研究科一年である。科目は今までの青年訓練所と同じであるが、授業時間数はいくらか多くなり、普通科は年間二六五時間、本科は男子が二七〇～二二五時間、女子は二六五時間、研究科は男子二二五時間、女子二六五時間となっている。四月から十一月までを第一学期とし、公休日を利用して昼間教授、十二月より翌年三月までを第二学期とし、夜間教習をする（女子は昼間）というものである。

青年学校開校に前後して、矢吹に県立修練農場ができた。昭和九年七月十三日、矢吹町に農村中堅人物を養成するため実習訓練を通して農民精神を陶冶する目的をもって、福島県立修練農場が設立し、同十年二月九日第一回修練生四一名が入場した。

また、昭和十一年五月、八幡原県営開墾地に新しい弥栄村を建設しようと、県内各地から七八戸が入植して来て開墾をはじめた。また、同十二年五月二十三日には矢吹が原に陸軍飛行場が開場し、矢吹の空を飛行機の爆音がひびくようになった。

昭和十二年七月七日日中戦争が起った。戦争が長期戦の様相を帯びてきたので、政府は軍備を拡張し、昭和十三年四月一日国家総動員法を公布し、戦争に必要なすべての労働力、資源、施設など、あらゆる部門を統制した（『日本近代史Ⅲ』）。工場がつぎつぎに軍需工場になり、生活必需品が少なくなり、昭和十四年九月一日から毎月一日を興亜奉公日と定め、同年十二



運動会での体練（武道）演技

月から木炭の配給がはじまった。昭和十五年一月になると、広島県吉名村で自主的に米を一人一日三合の通牒制をはじめ、同年四月から米・みそ・しょうゆ・塩・マッチ・木炭・砂糖など一〇品目が切符制になった。十月になると大政翼賛会が発会、十一月には紀元二千六百年の祝賀行事があり、国民服令が公布されて、男子はカーキ色の国民服を着るようになり、大日本産業報国会ができるなど、国内はすっかり戦時色につつまれて終った（『近代日本総合年表』）。

(二)　戦時下の教育

国民学校　昭和十六年（一九四一）四月一日小学校は国民学校になった。国民学校は、「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為ス」のを目的とした（国民学校令第一条）。そのために国民学校では国民科（修身・国語・国史・地理）、理数科（算数・理科）、体錬科（体操・武道）、芸能科（音楽・習字・図画・工作・裁縫・家事）、実業科（農業・工業・商業・水産）の五教科を設けて、皇国民を錬成するのである。これによって矢吹・中畑・三神の三つの尋常高等小学校は、それぞれ矢吹町国民学校・中畑村国民学校・三神村国民学校となった。教科書は全部一度にかえることができないので、昭和十六年には初等科一、二年、同十七年に初等科三、四年、昭和十八年に五、六年と順次にできていった。これらの教科書をみると、国家主義を徹底する教材が多く含まれているので、各教科の例をあげてみよう。

○国語　一年に「ヘイタイサン」二年に「金しくんしゃう」「らっかさん」三年に「参宮だより」「にいさんの愛馬」「軍犬利根」などの教材がある。習字には「神代天の岩戸」（五年）などがある。

○「初等科国史」では従来の人物主義から一転して、尊皇愛国、神国日本、海外発展、国防などの戦時教材が入った。昭和十五年に改訂になった「小学国史」の開巻第一頁に神勅がのせられている。この神勅は「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国は」ではじまるもので、つまり日本の国は代々の天皇が治めている国で、永遠に続き栄えるであろうという意味の神勅である。昭和十年に改訂した「尋常小学国史」五年の出だしが、「第一天照大神　天皇陛下の御先祖を天照大神と申し上げる。」ではじまるが、昭和十八年の「初等科国史」は「第一神国　一、高千穂の峯」からはじまっている。

○修身では二年に「サイケイレイ」「兵タイサンヘ」三年に「み国のはじめ」「日の丸の旗」などがある。

○音楽では巻頭に「キミガヨ」高学年には「君が代」と式日唱歌がのっている。一年に「兵タイゴッコ」、二年に「軍かん」、三年に「天の岩屋」「軍犬利根」「潜水艦」「軍旗」「三勇士」、四年に「靖国神社」「入営」「少年戦車兵」「無言のがいせん」、五年に「忠霊塔」「戦友」「特別攻撃隊」、六年に「日本海海戦」「落下傘部隊」などがある。また楽譜を読むのに従来の階名ドレミファをやめて、日本の音名イロハニで歌うようにかわった。

○図画の一年に「グンカン」、二年に「海のせんそう」「軍かん」「せんしゃ」などの教材がある。

昭和十六年十二月八日日本海軍がハワイの真珠湾奇襲攻撃に成功し、アメリカ・イギリスに宣戦布告し、わが国は第二次世界大戦に突入した。わが軍は開戦以来マレー沖海戦の勝利、マニラ占領・シンガポールのイギリス軍の降伏など、つぎつぎに勝利を収めたが、一方国民生活では、昭和十七年一月一日より塩の通帳制配給、二月一日より味噌・しょうゆの切符制、衣料の点数切符制など配給制が強化されてきた。

戦局と教育

ところが昭和十七年（一九四二）六月ミッドウエー海戦で日本軍が敗れてから、戦争の様相が変りはじめ、八月から始まったガタルカナル島の激戦も、同十八年二月にはわが軍が撤退を開始、五月にはアメリカ軍がアッツ島に上陸して、日本軍玉砕と敗戦が続き出した。この間国内では昭和十七年十一月から鉄道の乗車券の発売制限がはじまり、「欲しがりません　勝つまでは」の標語が流行し、翌十八年二月には陸軍省が「撃ちてし止まむ」のポスターを配布、六月には戦時衣生活簡素化実施要綱が出て、反物の長さを制限、長袖の和服やダブルの背広などの制

作生産を禁止、十月には闇米買入れ者に罰則をきめて、都会から近県へ買い出しの一斉取締りを強化した。

また昭和十六年十月大学や専門学校の修業年限を臨時に短縮し、昭和十六年度は三か月、同十七年度は六か月短縮して、繰上げ卒業がはじまった。昭和十八年六月学徒戦時動員体制確立要項がきまり、同年十月には学徒の勤労動員を年間三分の一実施、翌十九年一月には年間四ヵ月継続して動員、同年三月には遂に通年動員と決定した（『近代日本綜合年表』）。

昭和十九年になると、二月アメリカの機動部隊がトラック島を空襲、六月にはアメリカ軍がマリアナ諸島のサイパン島に上陸し、わが軍の守備隊玉砕、同じくマリアナ沖海戦で日本海軍は、航空母艦・航空機の大半を失い、十月アメリカ軍がフィリッピン中部のレテイ島に上陸、同じくレテイ沖海戦で日本連合艦隊の主力を失うなど、戦況はいよいよ悪化してきた。

国内では昭和十九年十一月にたばこが隣組配給になり（男子一日六本）、矢吹の隣組では飛行場から飛び上る練習機の爆音を聞きながら、防空演習に竹槍訓練に汗を流し、食糧さがしに飛び廻り、夜は灯火管制の下で警戒警報を聞きながら、ラジオに耳を傾けている日が続いていた。

昭和十八年、十九年の小学校はどんな様子だったのであろうか。西白河郡内釜子小学校の学校日誌をのぞいてみよう。

昭和十八年

五月　ヒマの種子を配布して、その栽培法を説明　桑の害虫駆除に少年団奉仕　毎月八日は大詔奉戴日　二十七日海軍記念日の行事

三十一日特別朝会でアッツ島の英霊に感謝の祈念

六月　五日山本元帥国葬日遙拝式

七月　防空講話　二十三日ガタルカナル島の英霊天吹駅通過、各戸に弔旗を掲げる　英霊帰還の出迎

八月　町葬　出征軍人見送り

九月　軍人遺家族懇談会　蚕飼育

十月　出征軍人家族、戦没者遺家族の勤労奉仕（稲刈）十六日靖国神社臨時大祭遙拝式　十八日白河防空演習見学（教員）　ドングリ拾い

十一月　一日白河で西白河郡航空少年隊結成式、西白河郡児童剣道大会　いなご取り　十日「国民精神作興ニ関スル詔書」奉読式
青年学校体力章検定　防空設備懇談会　入営兵壮行祈願祭　青年学校教練査閲　ＢＣＧ注射　落穂拾い　松笠拾い

昭和十九年

一月　少年団訓練
二月　出征兵見送り　十九日満州開拓青少年義勇軍壮行会（白河第一小学校）　婦人会総会　勤労奉仕
三月　十日陸軍記念日　出征軍人見送り　予科練合格者壮行会　勤労奉仕
四月　高等科勤労奉仕
五月　勤労奉仕　米供出の慰安会　出征兵見送り
六月　田植　十五日一七時四〇分この地方にはじめて警戒警報発令
七月　麦刈奉仕作業　十九日矢吹の熊谷飛行学校慰霊祭　勤労奉仕
八月　勤労奉仕　疎開児童慰問
九月　勤労奉仕　稗抜き取り作業
十月　三日軍人援護強調週間　稲刈　ヒマ採集並びに薬草採集　勤労奉仕　麦まき
十一月　いなご取り　ドングリ集荷　勤労奉仕　落穂拾い
十二月　勤労奉仕　防空避難訓練　疎開児童へ慰問品（餅）

昭和二十年

一月　青年学校勤労奉仕　出征兵見送り　入営兵見送り
二月　十六日この地方はじめての空襲警報発令（九時五分～九時一五分、一三時〇三分～一三時三〇分）
三月　校庭の防空壕作り

矢吹の各小学校でもこのような状況であったものと思われる。

学　徒　動　員

白河中学校では、生徒は通学に兵士のように巻脚絆（ゲートル）・軍靴をつけ、制服も国防色（カーキ色）となった。教科のなかで軍事教練が強化重視され、軍隊式の規律と理念が強制された。矢吹の飛行場にも勤労奉仕に来ている。戦争の激化に伴い、白河高等女学校も、白河中学より配属将校や教練教師の陸軍中尉を招いて軍事教練を行っている。

戦況が悪化し、昭和十九年（一九四四）学徒動員令が下ると、各校の上級生は学業を放棄して軍需工場へ動員された。白河商業学校は神奈川県藤沢市の日精工業へ、白河中学校は同県横須賀市・横浜市の海軍工廠へ、白河高等女学校は同県川崎市東京芝浦電機と、郡山市保土谷化学工業へ動員され、兵器の生産等を強いられた。動員されていた白河高女の三年生一四名が被爆死したのは、アメリカ空軍B29型爆撃機編隊が郡山を空襲した二十年四月十二日の白昼であった。

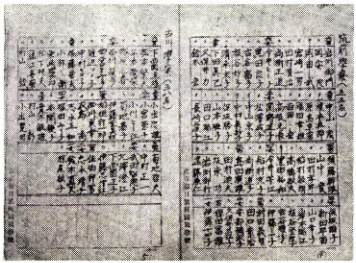
集団疎開

昭和十九年（一九四四）六月三十日の閣議で、国民学校初等科児童の集団疎開を決定、これをうけて矢吹町にも東京都目黒第四国民学校の児童二五〇名が集団疎開して来て、八軒の旅館等に分宿した。疎開児童の生活は乏しい食糧のもとで、衛生等の設備がととのっていなかったので、栄養を十分にとることもできなかった。この時のことを当時寮母をつとめた武田八重さんは、つぎのように思い出を綴っている。

学童疎開の児童（本町　佐久間光男蔵）

「思いおこせば昭和二十年三月二十一日、東京市目黒国民学校の一年生と二年生を連れて、矢吹の駅に降り立ち……一日一日と戦いが激しくなり、東京も危くなりましたので、一年生よりとのことで、私は第二陣の寮母として、先生一人、児童三八人と共に古川屋さんにお世話になりました。（昭和二十年三月二十一日）……東京では殆んどのものが配給でしたが、矢吹にいったばかりには、野菜はまだ配給でなかったような気がします。ご飯はどんぶりに一杯ずつでした。でも五月頃からそれも大変になり、児童のおやつ等はかんぷらいもでした。第二陣の児童は「かんぷらいも」という言葉がわからず、きょとんとしていたのを覚えています。新田あたりだと思いますが、畑をお借りして児童とさつまいもや枝豆をつくり、おやつにしました。お風呂も燃料がなく、児童達が裏の竹藪へいっては、枝木や竹の小枝を拾って来たものでした。……一番困りましたのは女の子の頭のしらみでした。……薬もなく精々頭にお酢をつけてすき櫛ですく位です。後ですっぱくなるのでお湯で洗うのですが、それも熱いお湯はかけられず本当に困りました。……一年生、二年生が病気になると、「おかあ

さん。」と泣かれて困りました。はしかの児童を抱いて水枕をもって防空壕にひと晩中入っていたこともありました。矢吹も空襲が激しくなってきたので、八月に入ってからは、朝起きると三十三観音に出かけました。……児童は一日中勉強できないまま、夕方宿舎へ帰りました。」



学童疎開者名簿（本町　仲西正次蔵）

決戦下の小学校

昭和二十年（一九四五）になると、二月アメリカ機動部隊が艦載機一、二〇〇機で関東各地を攻撃、アメリカ軍が硫黄島に上陸、三月九日アメリカの爆撃機B29が東京大空襲（二三万戸焼失）、四月一日アメリカ軍は沖縄本島に上陸（六月二十三日わが守備軍全滅）と、いよいよ本州の空襲がはじまった四月十二日、郡山大空襲があった。矢吹の人達はB29の爆撃のようすをはるかに見て、戦争のいよいよ本土決戦も近い思いがこみあげてきた。

こうなってくると小学校も授業どころではない。高等科の児童は四月から授業をやめて勤労奉仕、初等科五、六年生も勤労奉仕が多くなった。空襲警報が鳴ると、児童達は防空壕に駈け込んで警報の解除を待っているというわけで、落ついて勉強などとてもできない。七月十日には中畑村国民学校の講堂と教室の一部に燕一九五三二部隊が宿泊するようになったが、どこの国民学校でも講堂や教室が、兵隊や農兵隊の宿舎に、あるいは軍需工場に占領されるようになった。

四月にグラマン機が矢吹を襲い、大池北側農家の和牛が機銃掃射を受けた。七月十六日には断続的にボーイングB29機三機の来襲があり、グラマン機は当時陸軍特攻機の訓練基地であった矢吹の飛行場めがけて、二〇～五〇キロの爆弾を投下した。修練農場や矢吹町の東側の家並も機銃掃射を受け、兵士三名が負傷した。八月六日の朝一〇時頃、グラマン機二機が東北本線上り列車を機銃掃射し、汽車は停車し、乗客は背丈程に伸びたとうもろこしの畑に避難した（『目で見る矢吹町史』）。このように矢吹町は飛行場のあった関係で、たびたび機銃掃射などに見舞われた。

この頃矢吹町や三神・中畑はどんな様子だったろうか。町村議会に提出した役場の事務報告を見てみよう。

○昭和十九年三神村事務報告

「大東亜戦争ノ戦局ハ苛烈ノ度ヲ加フルニ伴ヒ、防空設備ノ充実ヲ計リ、十数回ニ亘ル動員下令、之ニ伴フ軍事扶助ニ関スル調査事務、金属類非常回収、綿供出、雑繊維蒐集供出、並献納運動等ノ戦争必勝完遂ノタメ、相当ノ事務ノ繁忙ヲ極メタルモ、何等ノ不都合ノ点ナク処理ヲ遂ゲタリ。米穀事情逼迫セルニ付キ、藷類、大小麦ノ増産供出、又ハ早場米供出督励、並管理米ノ割当目標完遂、軍用藁、千草集荷供出、蚕、繭、綿割当供出、小用排水事業等ノ土地改良ヲ行、大小麦ノ割当作付ノ確保、並ニ肥培管理ヲ指導督励等ノ事務多忙ナリシモ、無事遂行セリ。」

○昭和二十年矢吹町事務報告

「元旦早々ヨリ応召連日ノ如ク、開戦以来四五九名、戦病没者亦六二名ヲ算シ、各種生産力拡充ノタメ、応徴挺身隊ノ出動ハ繰返サレ、飛行場ノ特別攻撃隊ノ相続ク出陣ニ反シ、地上警備隊、食糧及松根油増産ノ海軍農耕隊、青年農兵隊ノ宿営、或ハ第一工廠ノ一部其ノ他重要軍ノ管理工場、更ニ帝都等ヨリ疎開学童ヲ始メ、一般ノ転入者ノ激増ニ依リ、主食、住宅等ノ斡旋事務生シ、加フルニ開戦中引続キ警戒、空襲警報等ニ依リ、爆弾、焼夷実砲、機銃掃射ノ攻撃ノタメ、一時ハ実戦場ト化シ、一部建物、農作物ニ被害アリシモ、人畜ノ死傷ハ殆ド無ク終レリ。」

学校養蚕（宇都宮市　石井亨蔵）

戦争中の思い出

こうして八月六日広島に、同九日長崎に原子爆弾が投下され、八月十五日遂に終戦となったが、戦争中国民学校に勤めていた教師や児童はどんな学校生活をしていたのであろうか。つぎに教師や児童らの想い出を抜き書きしてみよう。

「職員児童父兄一体となって防空ごうを掘りました。食糧増産の協力も学習に食い込みました。B29におびやかされ、防空帽に身を固め、袍を背に防空ごうへ避難しました。」（矢吹女教師）。

「郡山大空襲の時、当時としては巨大なジュラルミンの輝くB29が数機、学校の上空を通過し、校庭の南五〇〇米位の所に五〇〇キロ位の爆弾を投下して去った。もし

あれが学校に投下されたらどうなっただろうかと語り合ったものである」（矢吹教師）。

「〈あしたもお天気がよければ開こんに行くから、いつものように各班とも受持の道具を持ってくること。〉終礼の時に子どもたちに命令をつたえる。国民学校六年生の男女五〇名ほどの児童は、〈またか〉という冴えない顔をする。……鏡石村境の小高い丘が目的地で、荒地が続いている。子どもの力で唐鍬を精一ぱい振う。……畝をたててさつま苗を植えた。家から集めた木灰をふって夏にはそばをまいた。……親指ほどのさつまを掘って喜ぶ子どもたちを慰めることばもなかった。……作法室は農兵隊に占領され、……子どもたちは防空頭巾をかぶって登校した。子どもたちは弁当をかくしながら食べた。」（矢吹男教師）。

「私の卒業は昭和十九年の春、太平洋戦争の激動期で、綿を入れた防空頭きんを背にし、色のぬらない白木のままの鉛筆を手にし、〈ほしがりません　勝つまでは〉の標語に、衣食の不足とたたかい、空襲とたたかい、土手や校庭のすみは畑と化し、大豆やかぼちゃの葉がゆれうごき、……農家への手伝い、広い山地の開墾、大木のねっこほり、冬はわらざいくと小さい身体にむちうって過ごしてきた六年生のころ…」（矢吹女児童）（矢吹小学校創立百年記念誌『百年』）。

「校庭に南瓜（かぼちゃ）を作り、空地（あきち）及び道路の両側に大豆を蒔き、児童生徒の食糧難不足をおぎない、冬季間は……校庭の一角に炭釜を作り、童師一体、炭焼きをして冬の寒さをしのぎ、昭和二十年春には戦争苛烈となり、空襲のため学校での教育が危険となり、部落分散教育の止むなきに至り、各部落の神社等にて授業をし、更に各部落に増産畑を借受け、荒地を開墾してさつま、そば、南瓜等を作って農耕中心の教育と化し、空襲警報のたびに校長先生が御真影を背負って、神田の蝦夷穴に避難する有様でありました。かくして六月頃より学校は矢吹飛行部隊の宿舎となり、学校教育は停止の状態でありました」（三神男教師）。

「女はモンペ、男はズボン姿で、寒い霜の朝を下駄やぞうりをはき、ズキンをかぶり、教科書をふろしきに包み登校したものでした。裏山の上に奉安庫があり、どての中ごろに二宮尊徳先生の銅像があった。そこを通る時は最敬礼をして通った。……授業をやる時間は少なく、避難訓練や木の葉さらい、落穂ひろいなどをして、それを教材費にも当てた。広い校庭の廻りには南瓜や馬鈴薯などが作られ、先生の指導で手入れをし、食糧の補いにした。……ときたまの空襲で裏山ににげまわり、あまり強く目をふさいで見えなくて、歩かれなかったこともあった」（三神小学校創立百周年記念誌『あゆみ』）。

昭和二十年八月十五日、職員一同はつつしんで天皇のラジオ放送をおききした。そうして戦争に負けたくやしさと、戦争が終ってホッとした気持がまざり合って、妙な気持になった。これから日本はどうなるかと不安にかられながらも、灯火管制もなくなり、しばらくぶりで明るい夜を迎えた時はうれしかった。こうして戦時下の教育も終りを告げた。

（石井　亘）

四　文化活動

(一)　明治・大正・昭和前期の文芸

智識の戦場

明治三十二年（一八九九）二月二十日、矢吹の矢吹平司が「智識の戦場」という月刊雑誌を創刊した。この雑誌には文芸欄があり、漢詩・和歌・俳句などの投稿があり、第一一号（明治三十三年一月号）から新体詩が紹介された。二〇号より発行所が長沼に移り、明治三十五年八月まで発行されたが、矢吹地方の文芸運動を盛り立てた功績は大きい。矢吹で投稿していたのは　大木方弘・木下ゆう・鈴木愛松・泉崎隣村・熊田不敏生・月堂（以上矢吹村）、小針七左衛門・高久健蔵（以上中畑村）、笠松羅海・得庵仙乗（以上三神村）などであるが、そのうち和歌を抜き書きしてみよう。

「智識の戦場」創刊号
（長沼町　古川昇蔵）

此の朝げ見はてぬ夢もさまされて
　なかなか嬉し山ほととぎす　　高久健蔵

啼きわたる声のゆくへもありありと
　月に見へつるほととぎす哉　　鈴木愛松

秋風の吹入る窓にささかにの
　糸より細きはた織の声　　小針七左衛門

三千里

昔から東北地方を行脚した文人墨客は、芭蕉をはじめたくさんいるが、明治期になっても奥の細道を尋ねる旅人は多い。俳人河東碧梧桐もその一人である。碧梧桐は明治三十九年（一九〇六）十月六

日、白河から須賀川に行く途中、矢吹を通っている。碧梧桐はその時の旅行記『三千里』のなかで、つぎのようにのべている。

「大木の松並木が側に立並んでおる。十間巾の大道が果てもなく真直に見通される。何ということなく大きい心持になる。時折松にからんだ蔦が燃えるやうに紅葉しておる。籠を背負った娘が盆歌をうとうて来る。……二時間余あるきつづけたが、まだ飯を食う処がない。矢吹へはまだ一里もあるかと聞くと、なァに二三町じゃという。午後一時矢吹に着く。三時間で雨中泥濘の滑らかな道を約五里あるいたのであった。

飯屋ある里なれば新蕎麦もあらん

須賀川までなお三里の道をあるいて草臥れた」（『三千里』）。

東北の旅

大正六年（一九一七）九月八日、アメリカのシカゴ大学教授で人類学博士エフ・スタール氏が白河を発って人力車で矢吹を通った時の紀行文が東京朝日新聞にのっている。

「この間これということもなく矢吹に着く。俥の立場の近くの茶店に下りる。トゲトゲの小さい砂糖菓子がある。此れは金米糖と云うものだと、私は初めて喰うた。……私は此辺の農家が気に入った。茅葺屋根で奥行の狭い幅のだだっ広い家、それで家中戸などは無く、養蚕室、料理室、寝室、待合室、客室、それに馬小屋迄一目の間に見通しが出来る。四面開放、何と気持が善い。此辺屋根に諸所藁で出来た馬がほうり上げてある。房州附近で見た者とは形は少し違うが、いづれも七夕様の日に上げますとばかり、何の為か未だわからぬ。屋根の煙出しも気に入った。迷信ではあるが〈水〉と云う字が書いてある。此の家の軒下に馬という字を三字書いて逆さに貼ってあるのを……」

とこの辺の農家に興味をもったらしく、東京に帰ってから、もう一度行って農家の写真をとって来たいなどと言っている。

雉と蓐舟

さて矢吹の風物を書いたものは少いが、その一つに「野雨の家」がある。これは大正十一年（一九二二）十一月二十八日より十二月一日まで福島民報に連載された紀行文で、布南（新聞記者）が昔同じ仲間であった中目夜雨（泉崎村出身）の家を訪れた時のもので、矢吹の猟場のようすがよく書かれていておもしろい。

「そして其の町が、道が頗る平で町端れからすぐに大きな老松の並木が見える。そして松風が淙々たる様に響いて来る。僕は遽かに封建の世に生きているかの様な感じがした。そしてこの国道のこぼれ松葉を踏んで傍の桑畑に出ると真昼に雉が飛び出すと云う次第である。……ここの（雉）は畑の露面に遊んで居る。僕等の頭に映って居る世智辛い現代には無い図である。……こう考えなが

ら汽車に乗ると、田中貢太郎氏が僕に〈かしはらのしげきが奥の名無し池吾雉打てば紅葉散るかも〉と書いてくれた（歌を思い出した。）」

大正十一年十月八日発行の「福島県消防新聞」に、矢吹郊外の風物によせて、自分の感情をのべているが、当時の大正デモクラシーの思想がよく現われている。長文ではあるが、今ここに転載してみよう。

初秋の矢吹郊外

取残された唯一の芸術品を訪ねて

野萩と陸橋穂の　みのり豊かに

大陸的な白鳥の飛趁　若き美術家を

追憶しつつ

鮫畔

月明の夜街路に立った私しは、遣る瀬なく寂しかった、友を呼んでビールと古新聞紙と魚鑵とを提げて町を横切り線路を越いて製板所跡の屑塚に上った、そうして新聞紙を敷いて月あかりに盃を交し乍ら、はてしなき矢吹原の地平線上に浮び出た盆大の月を賞し乍ら矢吹情界の興亡史を編むべく私しの蒐集せる幾多の資料に就て身の冷るのも知らなんで語らったあの秋の矢吹原は再び恋しくなって来た。

小松原一面に初茸が出るばかりでなく野萩とカルカヤそれに陸稲穂が重く垂れてあるあたりは秋そのものの触感が胸にすく許りに迫て来る。矢吹町の北端より東に折れて線路を越い幅狭い詣道を約五丁程行くと翠松の間に朱塗の華居がある、これを抜けて更に進むと大小の奉納華居が二十基ほど建てある。そして何れも其奉納主の名札が花柳界筋の者である事を見てもその方の守り本尊である事が判る即ち矢吹二百の女郎衆がそのむかし麝名を馳せた時朝な夕な此の三光稲荷神社に参詣した事がありありと読まれる。神社は左程崇厳な建物ではないが歴史が古いだけ関東方面の花柳界からも多くの供進物が供へられてある参拝して裏に廻ると何人も目に付く一枚の扁額がある。桐の板に彩色して女郎衆の名が書かれてある。私しは初めの程は大それた感興も催さなかったが段々見て居る中にそれは矢吹情界を語る唯一の遺物であり情界を中心とした矢吹地方農村の興亡を知る上に於て最も意義深き唯一の芸術品である事を看取した。一昨年の秋迄矢吹に梅崎と云ふ青年書家が居た、九州生れの快活な男で美術学校出身で玉章門下の処から玉集と号してあった。郡山に五年程居て矢吹に移ってからも三年程居られたので県下も多く遍歴して名を知られてあったから君の書いたものも随所に見られる、私は一日君を矢吹東郊に誘ふて其の扁額の観賞を共にした。そして画の構想も非常に優れてあると激賞して呉れたので私はその縮写を君に御願する筈であった。その後いくばくもなく君は満韓巡遊の途に就いて以来再び帰来しないので空しくなって居る。私はこれを一つの淫蕩気分から観賞するのではない。矢吹町を中心としたS村の如きは戸数三百の小村で年々小作米の三千

五百俵程他の地主に吐き出して居る。古稀の老爺は言ふ元は此の村も何不自由なく暮してあったのだが私し等の祖父の頃飲む打っ買ふで女郎屋に流連げ田を入れて遊んで終ったので私共は浮ばれぬ其時賢くやったものは何れも地主になって居ります。一反歩十円位のが今は三百円もして居ります。今の生活苦から浅墓なりし祖先を呪ふ声には涙さえ落ちるのであった。私はその村に移った最初の日誌に『今私の住む部舎の東面一帯は万頂の稲田でそよ吹く風に稲波婉々として軽いささやきを見せ阿武隈の流れを挾んで茫々果しなき耕田だ遠く田村の山々は紫雲の中に翠巒を浮かせてその和し静かな野趣は与謝野晶子さんの歌でも読む時の様に落ち付いた感じになれます』こう美しく映じたこの村も小作組合の三つもあり毎年納入期になると騒ぐを見た時私しはそこにある問題を投げ出された如く暇ある毎に調べ上げた老爺の言二百の女郎、三光稲荷の扁額、一世の賢君松平楽翁公に依て培れた白河郷の健実な美風もこの二百の女郎に艶名を謳ふ頃爛熟期に入たのだ白鳥が高く飛翅して大陸的な矢吹原の中にもそうした幾多のなぞが秘されてある。私しは更に筆を起して叙して見たい。

大正十年矢吹に開業した野木勇医師は、学生時代から俳句をよくし、昭和九年頃より俳誌「鹿火屋」（主宰原石鼎）「桔槔」（須賀川）に鵜石の俳号で句を出しているが、俳句だけでなく写生文もものせている。その中の「蓴舟」の一節をぬき出してみよう。

「蓴（じゅんさい）の花が赭けたやうな紅色を小さくならべて浮いている。（蓴採りの）男は水棹をグッと沼底へさしこんで舟をとめると、刈り鎌の棹をザブリと水底にくぐらせ、一と揺り二タ揺りする。薄濁りした水が底の方から湧いて来る途端に、水面の蓴の花がスッと水をくぐり込んでしまうと見ている中に、鎌のたぐった先に蓴の長い葉柄が薄紅色をからませて浮び上って来た。引きよせた蓴の根をポチャポチャ水の中でうつろな音をさせて、男はやがて銀色をした蓴の嫩芽の一塊を採り出した。＜清浄なもんですヨ。＞と又同じようなことを云い乍ら自分の掌に採った蓴の芽をとろりと落した。ひやりと冷たい感じが自分の掌の上にあった。掌のぬくみの中へこの銀光をふくんだ蓴の芽が一点の冷――沼底の冷えをそのままにとかし込みます。玲瓏とした膠様質の心に珊瑚珠の色をもつ蓴の芽が、沼の神秘を語るように自分の掌上にうづくまった。」（桔槔）

昭和三年頃三神青年団の若者達が、文集「土の香」を同十五年頃まで続けて出していた。素朴な若者らしい文章が綴られていたそうである。昭和十九年から二十一年にかけて、矢吹の渡辺正昭氏が「盟友」という文芸誌を出していた。戦時中は憲兵、終戦後は進駐軍の検閲を受けるなど、苦労して発刊した努力は大きい。

(二) 歌　謡・詩

矢吹の歌

明治時代には〈詩〉といえば〈漢詩〉というくらい漢詩の時代であった。「智識の戦場」の文芸欄をみても全部漢詩である。明治三十三年（一九〇〇）一月号から新体詩が掲載されはじめたが、一般投稿者が作品を寄せるまでにはならなかった。

大正十三年（一九二四）、福島県教育会が全県下の小学校から小学生の童謡を募集したが、その時三神小学校の生徒二人（角田淑子、相楽武夫）が入賞している。

四年　角田　淑子

りすがゐた　　前のはやしの　　松の木に
みんなでやあやあ　　さはいだら
枝から枝へ　　にげうつり
しまひに　　どっかへ　　いっちゃった

（福島県小学児童童謡集）

大正の終り頃になって詩をつくる人が出てきたが、昭和時代になると、レコードの影響もあって、〇〇小唄など歌謡をつくることが流行してきた。

昭和三年（一九二八）頃有志の人達が国営開墾の歌をつくったりしているが、その一部を『矢吹町史』第3巻より抜き書きしてみる。

矢吹が原開田数え唄

仲西呆堂、岡部喜四郎合作

一ットヤ――広い野原が田に変る〳〵
　国営開墾何うぢゃいな〳〵
六ットヤ――向ふに見ゆるは二股よ〳〵

流れてお化粧の水までも〳〵

矢吹が原開田新豊年節　武藤一策作

昇る朝日の飛行機で見れば
一目五千町の矢吹原
雉子や兎の矢吹が原も
やがて黄金の花が咲く

矢吹小学校の校報「矢吹教育時報」第二一号（昭和五年六月）に、矢吹の名所を織り込んだ「矢吹の歌」がのっている。

矢吹の歌　　矢吹チカ作

矢を葺きして（いたして）ふ古の
矢叫（やたけ）びの世を偲（しの）ばるる
その名も床し陸奥（みちのく）の
荒れし昔の語り草
昔源義家の
駒の跡とや今もなほ
岸に刻める三十の
三観音は何時（いつ）の世か
いつきし人も白ふじの
今は神さび苔むして　　（以下略）

同じ頃中畑小学校長星平三郎氏は「中畑小唄」をつくり、校庭で生徒も青年達も輪になって踊ったという。

中畑小唄　　星　一朔作

一、ハア　泉川辺のあねさんかぶり
　　とけし前髪の水鏡

土手にれんげの花が咲く
キラシオイデヨ中畑へ
二、ハア　夕日うすれる菜の花畠
そよ吹きや黄金の波をうつ
朧月夜に蝶が飛ぶ
キラシオイデヨ中畑へ　（以下略）

中堅詩人

福島県で漢詩などにかわって、詩が盛んにつくられるようになったのは、大正時代をすぎてからである。

大正三年（一九一四）三城目に生まれた大滝清雄（本名徳海）は、学生時代寺田弘とめぐり合い詩をつくりはじめ、昭和二年（一九二七）詩誌「中堅詩人」を発刊、それから詩作一筋に歩み、現在中央詩壇で活躍している詩人である。昭和二年祓川光義の「北方詩人」に投稿し、同年早くも詩集「風は雑木林」を出版、同五年には詩誌「鷹巣誌人」を発刊するなど、若い清雄の詩作活動はすばらしかった。この「鷹巣詩人」には中畑の岡崎真平が投稿するなど、詩を作る人もだんだん増えてきたが、昭和七年大滝は川端康成らの新しい文学にあこがれて上京し、日本大学学芸学部で康成から創作の指導を受けた。そうして詩誌「詩と方法」「新詩学」により詩を発表し、両誌廃刊後は「鯱」により詩作を続けた。

大滝の初期の作品は二つの詩集「風は雑木林に」「阿武隈だより」（昭和十五年刊）などにみることができるが、その中から「風」をあげてみよう。

風

かがやく大地を見つめていると
大地から生れたのだと思いたい。
澄みとおった空を見つめていると
空から生れたのだと思いたい。
ああ　まばゆい秋の太陽よ。

あなたの秘蔵している白金の笛を
しばらくわたしに貸し与えてください。

黄　風　抄

昭和十三年（一九三八）大滝は軍隊に召集、同十五年北支戦線に出発し、戦場での作品は戦場に出発する直前に寺田弘と発刊した詩誌「虎座」に発表した。昭和十七年大滝は戦傷を受けて帰還し、東京の日本赤十字病院で療養中に、戦線での作品をまとめ、戦死した戦友の霊に捧げたいと詩集「黄風抄」（昭和十七年刊）を出版した。この「黄風抄」が日本詩壇詩集賞を受け、その年「歴程」に作品を発表、続いて「現代文学」「文芸汎論」などに作品をよせるようになった。

終戦後は郷里矢吹に戻り、中学校の教壇に立ちながら詩作にはげみ、後進の育成に努めたが、ここに「黄風抄」の中の「川」を鑑賞してみよう。

川

川が見たい　川が見たいと　兵等は語る。
そういう時の兵等の顔は
どす黒い埃の中で涼しくあからむ。
ちょうど　心の中に清澄な水を湛えた故郷の川が
緑を映して流れているかのように
それなのに　敵を求めて　十幾日
私たちの前には小麦粉のようにむせっぽい
黄土の畑が果てしなく続くばかり。
川といえば　濁った水さえ流していない
地球のあばたの溝のような
とがった枯れがれの河底ばかり。
「しかも　この殺風景な河道ときたら
　敵の得意の逃道なんだから……。」

舌うち吐き出す兵らの心の中に
また　ひとすじの川が流れる。
鳩などやさしく浮かべながら。

（この項は『定本大滝清雄詩集』による）

中畑八幡神社献額の一部（根宿　八幡神社）

㈢　俳　句

共　楽　集

中畑根宿の八幡神社に明治三年（一八七〇）八月の俳句献額があるが、幕末から明治にかけて、矢吹あたりでは盛んに俳句の会が催されていた。いまその献額の中から矢吹の人の句をあげてみると、

しっくりと鹿の立けり椎の本　幽篁
おりて来た山の影呑む清水哉　芝香女

などがある。幽篁は名岡崎長左衛門光晴で、絵も好くする人である。中畑には竹堂（岡崎長三郎）子彝（小針発右衛門）文郁・蘭渓・景山・松廼居・南山などの雅号をもっている小針七左衛門など、書や絵などをよくする人がいる。根宿の八幡神社には竹堂・幽篁の絵馬がかかっている。

明治十八年六月刊の中島山麗編の「共楽集」を見ると、つぎのように矢吹の俳人達の句がたくさんのっている。

その水に魚もそだててかきつばた　大和久芳賀　為外
椿咲元や三つ子の置草履　今出屋　一笑
みじか夜の積りて寝むし旅もとり　いりや　一矢

梅に手を合わせて児の笑顔かな　大野楼喜久代
さっと来る風に色あり湘簾　いりや義山
時鳥とかく寝足らぬ夜なりけり　松山旭山
人違いしてはづかしや朧月　つるや内こと女
ひと雨に一しほまさる若葉哉　松山さく女
湧く底に小石の動く清水哉　杉山杉窓
頓て猶頼む蔭なる若葉哉　三春屋写山
来ぬ客に座敷も明けて青涼簾　松山
大川を人の見て居る小春哉　藤白屋松雨
炎天や石運び居る関普請　世外
その名よりやさしき花や鬼薊　ちくぜんや
常盤に見ゆる花葉や燕子花　たつ女
炎天や洋傘白きくすり売　長尾尾隠
春風の捌きて行くや洗い髪　仁科豊月
　　（以上矢吹地区）
雪晴や麓々の夕烟り　小針花蓬
松の葉をそえてさし込む初日哉　小針景山
啼尽すかぎりはしらず夕雲雀　小針子行
筥はねていそがぬ船や春の川　豊哉
海ちかき京の味や蜊やき　鳳文
　　（以上中畑地区）
置土の道ぬかりけり梅の花　三城目楠梅風

このように当時俳句を作る人がかなりおり、しかもいろいろの階層の人がいたようで、中には喜久代という遊女の句もまじっている。また『智識の戦場』の文芸欄にも、矢吹の人達が俳句を投稿している。（明治三十二、三年頃）

嘶て駒の駈入るかすみかな　豊月

人の気も動き初めけり春の風　一峯
夕立のかかるか窓に這入る風　孤窓

（以上矢吹地区）

楽みの長きを菊の根分哉　重雪
老木にと風の受よき柳かな　閑山
気心も浮立頃や春の草　智格
隔てなき梅のかほりや隣垣　田端

（以上中畑地区）

笹鳴吟社

河東碧梧桐が明治三十九年（一九〇六）十月、東北旅行の折に矢吹を通り、郡山に十月六日から十九日まで逗留した。当時郡山には群峰吟社があり、盛んに俳句を作っていたから、碧梧桐も郡山の居心地がよかったのであろう。

群峰吟社は明治三十一年に結成した俳人の集りで、中央から碧梧桐・高浜虚子などの有名な俳人が郡山を訪れては、盛んに句会を開いていた。

明治三十六年七月、郡山の安積中学校に転任して来た俳人西村雪人は、中学校の教師や学生達と、俳句の集まり、笹鳴吟社を結成した。

この吟社に入った中学生の中に久米正雄（俳号三汀）がいた。三汀は俳句に夢中になり、郡山の句会は勿論、須賀川・福島の俳句会までも遠征して点数をかせいでいた。この三汀について句会を歩きまわった一人に、三汀の一年後輩の野木勇（俳号山櫨子）がいた。山櫨子は雪人や三汀らが投句していた雑誌「日本及日本人」の日本俳句欄（選者碧梧桐）に投句し出していた。明治四十三年、三汀が学校を卒業して上京した後、山櫨子がそのあとをついで作句を続けたが、山櫨子は当時のことをつぎのように回想している。

「もう毎週の土曜日午後の例会を待ちかねて二、三人で吟行をやる。偶会をやる。果は遠征と称して、突然大勢して近くの吟社に

押しかけ、丁度昔の武者修業者の道場荒しの様な気で、結構受け売りの法螺を吹いたり、寄れば触れば句の話ばかり、学科を忘れて新聞雑誌に投句して、その発表に熱をあげていた。……笹鳴の同人達の間には多作が流行して、濫作も交ぜ紅葉百句、寒月三百、雪解二百などと、一題多数吟を仲間に誘った。しかもこれが三汀氏卒業間近くに、その頃新傾向の憧憬の的であった「日本及日本人」誌上碧梧桐選で、幾多の先輩を排して〈魚城移るにや寒月の波ささら〉以下堂々一五句をズラリと巻頭に並べられた時には、我等同人も先生達も、ガンと計り頭をどやされた程のショックだった。かくて景高潮に達した笹鳴吟社も、三汀は一高文科へ入学となり、……山櫨子独り孤塁を守り、翌年漸く日本人巻頭に枯野一五句を連ねて、われ等の若き笹鳴吟社は消滅してしまった。」（「桔梗」昭和十二年六月号）

館　山　会

明治四十四年五月、郡山から今泉桐舎らが矢吹を訪れた時、鶏の鳴き声をまねる鶯がいるという事を聞いて鶯橋に行って、「飛び去り飛び来りて頻りに鳴くは真の鶏としか思はれぬ迄に巧なり。珍鳥なるかなと思はず嘆声を発す。」と福島民友新聞は報じている。

鶏鳴す老鶯の滑山笑ふ　　桐舎

さてこの頃矢吹に吉川巴九水という俳人がいた。巴九水は明治四十五年二月号の俳誌「清風会」（藤沢）に〈炭釜も近う燃ゆ朽木光る宵〉などの句があるので、この頃から句を作りはじめのであろうか。山櫨子と巴九水はよく集って句作を続けていたが、明治四十四年十月、二人で館山会という俳句会を矢吹につくった。

飛ぶ螢舟寄せて芦がさと鳴る　　巴九水
夏風邪に三日寝て枇杷に走る色　　山櫨子

しかし間もなく山櫨子が矢吹を去って上京した。巴九水は一人になって終ったが福島民友などに投句を続け「我がたてやま会は自分独りである。しかしいつか復活しようと思ってゐる。」（大正四年七月）と強気であったが、しょせん一人では俳句会は成り立たなかった。

夏野遠く展けて屋根の光り見ゆ
寺は蔵を抱いて暑う蝉鳴けり　　巴九水

巴九水は大正八、九年頃、俳誌「軒の栗」（長沼）に熱心に投句している。

花も交る穂草に風の薫る土手　巴九水
陽を吸ふて動かぬ牛や山の秋
俥置けば俥にさわぐ落葉かな

やがて巴九水も上京したが、俳句を続け、山櫨子と共に「桔槔」などに、昭和のはじめ頃まで投句していた。

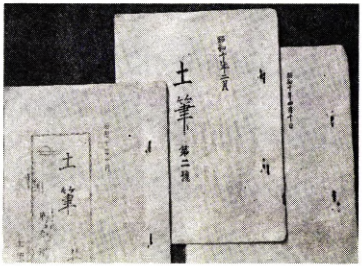
屋根石に一雨ありし初冬かな　山櫨子
涼しさや歩けば触るる草ありぬ　巴九水
灯に近き芒の闇を恐れけり
長男生る
ぜんまいの如く握れるこぶしかな

土筆俳句会の人々（本町　横川清蔵）

土　筆　会

大正十年（一九二一）野木山櫨子は矢吹に帰って来て延寿堂医院を開業した。そうしてしばらく句作を遠ざかっていたが、昭和九年（一九三四）より再び句を作りはじめ、「鹿火屋」（東京、原石鼎主宰）「桔槔」（須賀川）に句を出すようになり、俳号を鵜石と改めた。また土筆俳句会をつくり、矢吹をはじめ白河・泉崎の人々と句作を楽しんだ。昭和九年にできたこの俳句会も、昭和十年一月から俳誌「土筆（つくし）」を発行したが、その中から矢吹の俳人達の句をあげてみよう。

木枯の手にさからひし弔旗かな　法外
何をかや叫ぶ人あり冬の山　白水
大木に塞がる窓や冬山家　岐方
折れ葦に並びて蝋蝋の陽に眠る　霞外
帽のまま礼する朝や入学児　一鶏
触れて見ん落花に黙す弥陀の膝　南石



「土筆」（本町　平山寿満蔵）

花吹雪鴉もいでてよぎりけり　冬扇女
酒ありて唄あり桜散るもあり　きくを
おのが影澄ませて蝌蚪の水曲かな　鵜石

このうち根元岐方、横川白水、五十嵐法外らは川柳もよくし、また岐方は須賀川の小学校に勤めていた頃、奥さんの笑女からすすめられて明治四十三年（一九一〇）から大正六年頃まで俳句を作っている。

この頃泉崎に俳句会「白楊」（昭和九年十二月創刊）白河に三井田柏影の主宰する「龍膽（りんどう）」会（昭和十一、二年頃）お互いに俳句会に出たり、句をのせ合ったりしていた。

馬叱る深きわだちや落葉道　岐方
口紅にふれて氷を捨てにけり　笑女

白水　霞外　法外　鵜石

麦踏みやついて来し犬あぜを掘る
汽車の烟こずゑを出でず冬木立
鍵箱に鍵ふれあふや大晦日
山の日のふと馬くさし朴落葉

土筆会はかなり続いたが、それらの中で冬扇女は後に俳号を本名初子と変えて、俳誌「鹿火屋」「桔槔」に、昭和九年から十二、三年頃まで熱心に投句していた。

したしさは露凝る墓の草にさへ　初子
粧ふてこもりがちなる花の頃
歩みそめて小さき影や朝顔に
梅雨晴や風吹くごとき子の歩み
茜雲樹氷を染めて子の頬に

（「桔槔句集」昭和五十年十二月刊）

鵜石も昭和九年頃より「鹿火屋」へ、そして「桔槔」などへ投稿し、とくに「桔槔」の同人として、句に文にその才能を発揮していた。いま当時の「矢吹が原素描」と思われる句を、「桔槔」からひろってみる。

翔たつ鳧のつばなの白さうばひけり　　鵜石
蓮舟鷺の下りしを感じけり
水番にかわせみるりをかくしけり

かくて日中戦争、第二次世界大戦のまっただ中の昭和二十年一月五日、鵜石は病気のため惜しくもこの世を去った。五三歳であった。

松の蕊みな曲りつつ夏至の風　　鵜石
さなぶりや鳧翔つわが田うつくしく
鶉ひとつとんでまたゐる黍の穂屋
猟犬が柮屋の犬を嗅ぎにけり
日だまりに来て風音や枯木採

（「鼎門句集」昭和三十年十二月刊）

㈣　川　柳

東北川柳

昭和二年（一九二七）一月白河の大谷五花村が川柳誌「東北川柳」を創刊した。五花村は明治大学の学生の頃、井上剣花坊を知ってから川柳にとりつかれた。五花村は明治大正を通して前句付、狂句、新川柳にあき足らず、剣花坊の〈川柳は民衆芸術である〉論に共感して、文字のあそびでなく、一七音の短詩としての川柳に打ち込もうとした。そうして大正四年友人グループと「白河能因会」をつくった。この能因会が母胎となって発足したのが「東北川柳」である。この「東北川柳」に早くから句を出しているのが野崎久ン坊である。

当時久ン坊は関平の学校に勤めていたが、穂積白音子の手ほどきを受けて、川柳を作り出した。

赤錆が財布の底にしがみつき　　久ン坊
朝風呂へぜいたくさうに立つ煙
吸ひつけた煙草思案をもて余し

その後喜感坊、岐方、法外、砂海などが投句しはじめた。

コップ酒馬は黙して聞いて居る　　法外
思ひごとただ灰皿にたまる灰
忍ばせた紙幣へとかくに手が触り
天杯で屠蘇を一盃多く飲み　　史郎
帰り馬車雪に晒して茶屋で飲み　　好柳子

こがね吟社　根元岐方が昭和五年（一九三〇）、金山小学校に赴任して来て、川柳の集まりを作ったが、それが「こがね吟社」となり、東北川柳金山支部が昭和九年にできた。このグループの中に鈴木砂海（後の白風）がいた。砂海はここで川柳に熱中し、東北川柳に投句するようになった。

寝ころんで大空の果などフト思ひ　　砂海
柏子木の音が凍ってる疎星
胸きんを開けっぱなして酔つぶれ
豊年も万作も出て草角力
思い切り言ひ得なかった淋しさ

いづみ川柳会　根元岐方が川崎小学校に転任して来たが、泉崎にはすでに「いづみ川柳会」ができていた。（昭和八年七月二十日）

偽善家のやうに葉かげに居る毛虫　　久ン坊
初年兵機械のように手を挙げる　　喜感坊
読み直す葉書に眼鏡借りられる　　岐方

昭和九年（一九三四）十月二十八日、東北川柳川崎支部が能因会の後援で、烏峠稲荷神社に川柳の献額をしている。

神風を当にするなと臍を撫で　法外
町内の境で戻る樽神輿　岐方
死に勝ちてそれから後は神まかせ　喜感坊
神棚も出来て世帯の恙なく　久ン坊
酔どれがかしこまってる神の前　笑女
大神楽神代の儘の笛の音　砂海

皺　横川喜感坊（後の柳禅）は大正時代に福島の鎌田にいた時、新聞に投句して入賞してから川柳にとりつかれて終った。根元岐方は明治の終り頃、郡山の松山可睡坊主宰の柳樽寺の句会に入ったのが、川柳を作り出したはじまりで、喜感坊も岐方も、その句歴は古い。

代診を見くびって居る高い熱
よく饒舌る女に氷解けて居る
欠伸から窓へ離れる事務机
ハンモック眠りについた風があり

岐方は終戦後、句集「皺」を発刊（昭和三十三年）しており、喜感坊は自分で句をまとめている。その中から戦争前の句を拾い出してみよう。

釣りあきた目に青空の高いこと　喜感坊
明日へまた生きる眼鏡をとってねる
吉凶は神のみが知る灯をともし
泣いた子の奥歯に秘めた強い意地
一人うたう唄はこころの淋しさか
声色を真似て電話の酔っている　岐方

㈤　その他の文化

神州青年研究会

明治二十二年（一八八九）、町村制実施によって、部落のいくつかが集まって矢吹村・中畑村・三神村という小さなまとまりをみせ、村の自治活動が軌道に乗り出した。間もなく日清戦争が起ると、村としてのまとまりが一層よくなった。明治三十一年二月には中畑村青年学友会で幻灯機を購入して各部落で幻灯会を開催した。それが日露戦争になると、今度は活動写真が登場してくる。明治四十年二月には福島育児院の活動写真が矢吹町・三神村・中畑村で開催された。明治四十一年一月一日、矢吹小学校同窓会の余興に蓄音器の演奏を聞くなど、新しい文物がつぎつぎに入り込んでくるようになった。これらの中にあって明治三十二年二月二十日、矢吹の矢吹平司氏は、青年の智識を啓発し、徳器を涵養して、青年の国民精神を昂揚しようと神州青年研究会をおこし、「智識の戦場」という月刊雑誌を創刊した。この雑誌は途中発行所が長沼に移り、明治三十五年三四号まで発刊したが、多くの青年の心をとらえて、青年教育に役立った。青年教育といえば、明治三十年代に三城目の笠松羅海が岩磐義塾を開設して青年の智識を高め、明治二十六年には中畑村に、二宮尊徳の報徳精神を研究し実践しようとする報徳会が創立した。明治二十四年頃明新で始められた青年の夜学会が、後に勤倹貯蓄、農事改良、窮民救済を目的とする尚徳会に生れかわった。そうして毎年下賜される御猟場の御手当金の全額を基本金にして、農蚕業の書籍を購入して、農事改良を推進しようとしている。

公　楽　館

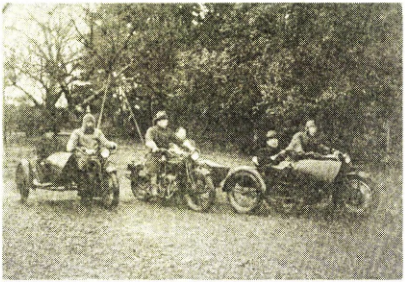
大正十年（一九二一）矢吹に合名会社公楽館ができた。公楽館は芝居（演劇）や活動写真（映画）などを興行する芝居小屋であったが、観菊会・演芸会・政見演説会・時局講演会など、三十数年に亘って公民館の役割を果たしてきた劇場である。

大正から昭和にかけて矢吹に義太夫を練習するグループがあった。大阪から毎年師匠を招いて長い期間練習を積み、最後にかみしもを着て見台を前にして語るおさらい会をして楽しんでいた。またサイドカーを並べて遠乗会などもした。昭和のはじめ頃御猟場の猟に来る人に頼んで、中国の上海から本場の牌を買って貰い、本を見ながら麻雀（マージャン）を楽しんでいたグ

ループもあった。このような楽しみは、ラジオがまだ一般に普及しなかった時、ごく一部の人の間で流行したものであるが、一般の人達の楽しみは、何といってもお祭りや縁日である。

矢吹神社祭礼と馬せり

矢吹神社の春祭は四月はじめで、せり場で馬のせり市の立つ日と重なり、日本各地から馬喰が集まり、街の通りには出店が所狭しと並び、見世物小屋が立ち、時にはサーカスなどもかかり、在から出て来る人などで、街の中はごった返しになった。明治三十五年（一九〇二）四月十九日付の福島民報は、矢吹の馬せりの盛況をつぎのように報じている。「同時に馬せりの期に際し人馬の雑沓を極め、五日間馬せり開庭にて六百頭程の馬匹を出し、最良なるものは百円余に上りたり。見物人も亦日々数千人に及び、宿屋の如きは毎夜八、九〇名ずつの投宿ありて、年々才々盛況に趣くもようなり。」



水戸への遠乗会　昭和２年ころ（字都宮　石井亘蔵）

郷土誌

明治四十二年（一九〇九）に県は各小学校に郷土誌の編さんをすすめた。各小学校では決められた項目に従って編さんしたが、項目によってくわしく書いてあるところと何も書いてないところもあるが、各村の歴史や当時のようすなどを知る上に貴重な資料である。とくに中畑小学校では、有識者より古文書の読み方を一々教えて貰って記録したとの事である。

その後矢吹小学校では、昭和五年（一九三〇）に「教育勅語煥発四十周年記念郷土読本」を編さんしている。謄写刷りで一八一頁、子供に読ませる本というよりは、誰にでもわかる郷土誌といったものである。また矢吹小学校では昭和三年十月より「矢吹教育時報」を月一回発行している。創刊号は謄写刷りであったが、すぐに活版印刷になり、学校行事、学級の成績、家庭への通知、家庭からの希望、当町内善行美談の紹介、衛生等を盛りこんだりっぱな教育広報である。昭

和五年十二月には野木勇医師が「いとし子」を創刊しているが、医師の立場から子供の衛生や教育問題を取り上げた野木氏の献身的な努力を忘れることができない。

昭和四年に矢吹小学校では校舎を全面的に増新築し、八月に完成したが、その落成記念行事の一つとして、一般町民の協賛による書画骨董の展覧会があった。これは町内の有志が所蔵している書画骨董を展示したもので、

○絵画―雪舟　文晁　羅漢　橋本雅邦　勝田蕉琴　岡本一平　北斎の版画

○書幅―東郷平八郎　後藤新平　河野広中　勝海舟　山岡鉄舟　松平定信書状

など一五〇余点が集まり、人々の目を楽しませた。

古墳及横穴探究記

明治二十一年（一八八八）十二月二十八日福島中学校の教師犬塚又兵氏が学校の冬季休業を利用して、県南地方の阿武隈川に沿って古墳を調査して歩いた記録が残っている。（岩磐史談）須賀川の蝦夷穴、和田の大仏の調査からはじめた犬塚氏は、三十日に三城目の加藤辰之助氏宅に泊った。三十一日、阿武隈川近くの田んぼの中の塚ノ越古墳を三つ調べている。

「（第三の古墳）東西に長く石壁大石を不用、皆方一尺位の石を以て畳む。以上の（三箇の）塚穴の位置鼎足を為せり。此塚穴より管玉一七箇其他小玉類数箇発見せり。今警察署に届出置けりと。或人云ふ、鏡も出でたりしを傭夫秘して出さずと、或は然らん。」

ついで久頭山の横穴古墳群をくわしく調べ、（横穴の数一五箇）神田戸ノ内の鬼穴を調べる。

「奥壁一大石、天井三大石、此塚穴中人の出入せしもの故、土にて埋し居れり。高さの如き詳なるを得ざりし也。此の構造入口は他に異にして、恰も舟の形の如し。」

そこから明新の沼和久横穴古墳群を調べて七箇の横穴を確認し、途中縄文土器片・埴輪の破片などを採集しながら、中島村松崎の横穴を調べ、二子塚に泊っている。このように明治二十年代に古墳をくわしく調査して歩いた犬塚氏の「探究記」は、矢吹の文化財研究に貴重な記録である。

獅子舞・平鍬踊　三城目の景政寺には四〇〇年来獅子舞・平鍬踊の芸能を伝承しており、秋祭には今でも踊を奉納している。このような民俗芸能を永く伝えることは、関係者の並々ならない苦労と努力が必要であるが、三城目の関係者が今にその芸能を演じている熱意を高く評価したい。中畑村にもこのような踊があったのであろうか、獅子舞の唄だけが残っている。一〇歳位の男の子三人が小太鼓を叩きながら踊る獅子舞、若者達が平鍬を叩きながら踊る勇壮な平鍬踊、この民俗芸能をいつまでも伝えて行きたいものである。

三城目にはこの外に「水祝い」の行事がある。須賀川の道山草太郎氏（俳人）が俳人達とこの「水祝い」（水かけ祭り）を見に来て、その時のもようを「桔槔」（昭和十八年四月号）に書いている。

いにしへの風花かよふ　水　祝　草太郎

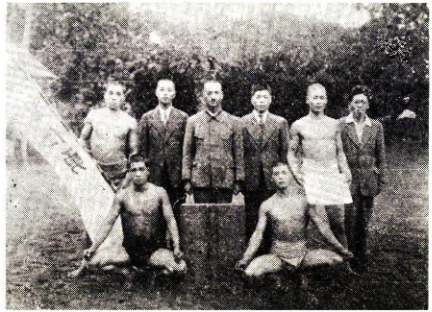
また第二次世界大戦中、須賀川に疎開していた太田三郎氏は、見たいと思っていた「水祝い」が見られなかったのを残念に思い、三城目を訪れて、古老から「水祝い」の話を聞いた。この時のことを氏が昭和二十四年に出版した民俗と芸術「東奥紀聞」の中にくわしくのせているが、このような民俗行事や民俗芸能はくわしく記録に残し、またいつまでも受けついでいってもらいたいものである。

（石井　亘）

五　スポーツ

(一)　武　道

剣　道　郡山の安積中学校ではじめて剣道が教えられるようになったのは、明治二十四年（一八九一）で、（当時は撃剣と言っていた）同二十八年より生徒の希望によって課外に撃剣と柔術の練習をはじめている。矢吹では大正十四年（一九二五）九月二十九日矢吹神社の祭礼に剣道大会があったが、剣道は古くから盛んにおこ



全日本青年学校相撲大会優勝の中畑青年学校チーム

なわれていたようである。昭和三年（一九二八）大日本武徳会西白河分会設立の時、三神村でもこれに参加したが、郡の武道大会には第一回（昭和三年）第二回（昭和四年）の二回に亘り、剣道で優勝している。この時のメンバーに相楽芳三・小林重孝らがいた。矢吹分会が西白河分会より独立した第一回の武道大会（昭和八年十一月）で、三神の瀬谷忠士が一般個人試合で優勝している（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―五八七）。

剣道の外に神社の祭礼などで催されるのが草相撲である。昭和十八年の全日本青年学校相撲大会の福島県予選大会に出場した中畑青年学校チームは、団体の決勝戦で常磐炭鉱チームを破って優勝した。その時のメンバーは（先鋒）井戸沼綱義・（中堅）井戸沼俊顕・（大将）薄葉重太郎・（補欠）増田留治であった。

銃剣道

矢吹町では日露戦争後の明治四十三年十一月三日帝国在郷軍人分会が創立し、初代分会長は石井良之助であった。この分会は志気を盛んにするために、大正十年四月二十四日の西白河郡連合分会の大会に銃剣術・角力・軍刀術・駈足等の選手を出場させている。また大正十三年九月二十三日の若松の支部大会に射撃・銃剣術・投弾・早駈の選手を送っている。

日中戦争が起ると、軍人分会の仕事も武運長久祈願、飛行場の勤労奉仕、応召兵の見送り等いそがしかったが、その中で昭和十五年十二月、銃剣道の防具を購入し、十二月二十日に皇紀二千六百年記念事業銃剣道防具購入披露式と銃剣術の大会があった。昭和十七年九月六日西白河郡連合分会武術大会に出場した矢吹の分会は未入営補充兵の銃剣術に優勝し、射撃では根本義正・森薫がそれぞれ三位、五位に入賞している（『矢吹町史』4巻資料編Ⅲ5―七三六）。

昭和四年五月皇居内でおこなわれた御大礼記念武道大会で、銃剣術の天覧試合に矢吹町出身の大木健次郎中佐が審判の栄誉を得られたが、大木氏は大正七年の天覧試合にも審判をつとめられた。

(二)　野　球・庭　球

ベースボール

明治三十六年（一九〇三）に矢吹小学校を卒業した海老沢高次氏は、小学校時代の思い出の中で、「子どもの楽しみは、当時流行しだしたベースボールやねんがらぶちやこままわしで遊ぶことでした」（矢吹小学校創立百年記念誌『百年』）。といっているが、安積中学校でベースボール会が結成されたのが明治二十三年十一月というから、ベースボール、つまり野球が流行し出したのはかなり古い。三神村に安積中学校のベースボールの選手がいたというから、ベースボールは早くからおこなわれていたものであろう。

安積中学校野球部（神田　藤井ハル蔵）

また安積中学校にローンテニス部ができたのは明治三十六年というから、ローンテニス、つまり庭球も、野球と同じようにかなり早くから流行していたものと思われる。

少　年　野　球

明治二十九年（一八九六）十一月に須賀川小学校の生徒が、仁井田小学校とベースボールの試合をしてるが、学生だけでなく、子供達のベースボールもかなり前から盛んにやっていたようである。中畑小学校の生徒が野球をやりだしたのは大正九年（一九二〇）からである。その当時から野球を指導していた井戸沼啓先生の話によると、その頃のボールは布を堅く丸めたものを使い素手であった。大正十年頃先生がはじめてスポンジボールを一箇買って来たが、ボールがこわれないように布で巻いて、糸でぬって大事に使った。グローブも一つ買ったが、これは捕手が使っていたそうである。中畑小学校は山田信、井

戸沼啓両先生の指導で、大正十二年にはじめて野球の試合に出場し、それ以後輝かしい戦績を残している。ここに井戸沼啓先生の「野球中畑をかえりみて」の回想談（中畑小学校創立百年記念誌『百年のあゆみ』）にもとづいて、戦績のあとをたどってみよう。

井戸沼先生は、「大正九年尋常科三年から野球の練習を始めました。ボールにジャレルと云った方が適切でした。四年後の大正十二年尋常科チームとして白河中学校グランドで少年野球に出場」とのべられているが、はじめて出場した大正十二年の大会では、決勝で白河第一小学校高等科チームと対戦し、七回まで七対七の同点で延長戦になったが、八対七で惜しくも敗れた。

大正十三年には白河第一小学校を破って七月の第一回の県大会に高等科のチームで出場した。会場は福島師範学校グラウンドで、七月十三日にまず福島第四小学校に8A—3で勝ち、準決勝でも師範学校附属小学校を10対3でしりぞけましたが、十四日の決勝戦で内郷小学校と対戦、五回表に大量得点を許し、5対3で惜敗した。この二日間のスコアをあげておく。（第78表）

第78表

	1	2	3	4	5	計
福島四小	1	1	0	1	0	3
中畑小	3	1	1	3	A	8

準決勝

	1	2	3	4	5	6	7	計
中畑小	1	0	1	3	0	2	3	10
附属小	0	0	0	1	1	1	0	3

決　勝

	1	2	3	4	5	6	7	計
内郷小	0	0	0	0	5	0	0	5
中畑小	0	1	0	0	0	0	2	3

県大会に優勝

昭和十四年（一九三九）、白河中学校グラウンドの県南少年野球大会で白河第一小学校と対戦して敗れた。同年六月に福島師範学校グラウンドの第二回大日本少年野球大会本県予選会に出場した。六月六日清水小学校を3対1で破り、七日の準決勝に附属小学校を6対3で破り、決勝に進んだ。決勝戦の相手は強敵福島第一小学校で、シーソーゲームを展開したが、5対3でついに優勝した。この時のスコアが福島民報にのっているので、のせておく。

「午後二時いよいよ中畑対福島第一小学校は玆に最後の雌雄を決すべく、戦線に立つこととなる。五千と称せらるる観衆の目がひ

とえに之等の小さな勇士の上に注がれる球審中村塁審石幡、島、先攻中畑、
第一回（中）井戸沼三振鈴木（益）捕飛富永投匍（第一）高橋二匍に死んだが穂刈四球を利し佐藤の犠打に二進柏木左飛に更に二塁を得んとして刺されたが其間穂刈生還一点を先取（中畑０第一１）
第二回（中）仁井田三遊間安打星の二匍に生きたが仁井田二塁封殺水戸鈴木（俊）三振（第一）小幡三振長谷川投飛浦井捕邪飛（両軍０）
第三回（中）蛭田軟打当らず鈴木（義）井戸沼三振（第一）沼崎一匍武石三振高橋遊匍し一塁失に二進したが佐藤三振（両軍０）
第四回（中）鈴木（益）四球富永投匍に出たが鈴木併殺富永二盗仁井田の二遊間安打に富永生還星二匍に死んだが仁井田其間に三進水戸の左飛失に生還し更に捕手二塁悪投と中堅三塁への暴投に水戸一挙に生還三点を入れて却って二点を勝ち越す鈴木の遊飛に止む（第一）佐藤三振柏木投匍木幡投飛失に出たが長谷川遊飛（中３第一０）
第五回（中）蛭田投匍鈴木（義）四球を利し更に捕手一塁への索制球の失に一挙に三進井戸沼遊匍に死んだが鈴木（義）生還鈴木（益）一二間安打二盗に成り富永の中堅前飛に生還仁井田の中飛に止む（第一）浦井中飛一挙に二塁を占め三盗に成り沼崎遊匍に死んだが浦井生還武石四球高橋の絶好の投後軟打に両者一二に拠る穂刈三振佐藤投匍（中２第一１）
第六回（中）星遊匍水戸二匍鈴木左前飛に出て二盗三盗に成ったが蛭田の二匍に機を逸す（第一）柏木四球小幡の右前安打に一挙生還小幡三盗に成らず長谷川中飛浦井捕邪飛（中０第一１）
第七回（中）鈴木（義）三振井戸沼二匍鈴木（益）右飛したが一挙二塁を得んとして刺され（第一）沼崎投飛夫武石三振沼崎二盗に刺され高橋投匍に万事休す時に三時半
かくして中畑対福島の第一小学校戦は五対三で惜しくも第一小学校は中畑をして栄冠を得しむるに至った。」

この時の両軍のメンバーはつぎの通りであった。
この時のスコアをあげておく。（第79表）

福島県代表になった中畑小学校は、福島師範学校グラウンドの東北予選で仙台市北五番町小学校と対戦した。手に汗を握る試合でたびたび中畑にチャンスがあったが、大接戦の末１Ａ対０で涙をのんだ。

この少年野球には中畑村をあげて応援し、選手が帰って来る時は村中で提灯をつけて出迎え、男は矢吹駅まで、女は三文橋まで出迎えたという。

県南大会優勝の中畑小学校野球チームと陸上競技選手

中畑		第一	
2	沼利雄	6	橋高
5	戸雄	8	刈穂
1	井一郎	5	藤佐
6	鈴次郎	1	木柏
4	富三郎	3	幡木
3	仁助	7	川長谷
7	星政信	4	井浦
8	永虎	2	崎沼
9	田栄	9	石武
	木信		
	鈴俊		
	戸田		
	水戸忠雄		
（マネージャー）			

大正十五年（一九二六）の県南野球大会で白河第一小学校を破り、福島県大会に出場したが白河第一小学校に敗れて終った。昭和二年春南湖グラウンド開きの記念少年野球大会に出場し、決勝で白河第二小学校を破って優勝した。中畑小学校の対外野球試合はこれが最後であった。

この時活躍した選手達は学校を卒業しても野球の味が忘れられず、中畑小OB軍を編成して野球大会に出場し、昭和三年、白河の町内野球大会に出場、同四年には須賀川町の県南実業団野球大会に優勝、同十年矢吹町マルボシ商店主催優勝額争奪戦の決勝で朝日クラブに4対3の逆転勝をするなどすばらしい戦績を残している。

庭　球

大正の初め頃から中畑の小針弥太郎氏の庭にコートを作ってテニスを楽しんでいたが、矢吹でも大正十年（一九二一）頃、藤田由太郎・藤田半蔵のきも入りでテニス同好会が矢吹小学校校庭で練習して

第79表

1回戦

	1	2	3	4	5	計
中畑小	1	0	0	0	2	3
清水小	1	0	0	0	0	1

準決勝

	1	2	3	4	5	6	7	計
中畑小	1	0	0	5	0	0	0	6
附属小	0	1	1	0	0	0	1	3

決　勝

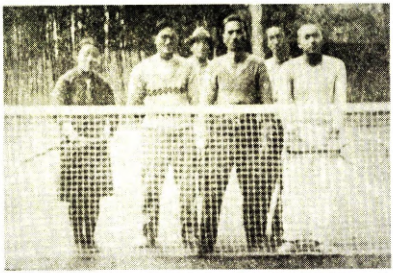
	1	2	3	4	5	6	7	計
中畑小	0	0	0	3	2	0	0	5
福島1小	1	0	0	0	1	1	0	3

いた。昭和の初め頃、矢吹神社の西にテニスコート二面を作り、同好者も増えて大いにテニスを楽しんだ。この同好者の中から安積中学校のテニス部主将をつとめた大木代吉（昭和元年卒業）・藤田恒三郎（昭和四年卒業）・仲西藤次（昭和七年卒業）が生れた。また藤田由太郎・長尾俊雄のペアは県南庭球大会に出場し、須賀川で一回、棚倉で二回優勝したという。（昭和十年頃）（長尾俊雄談）

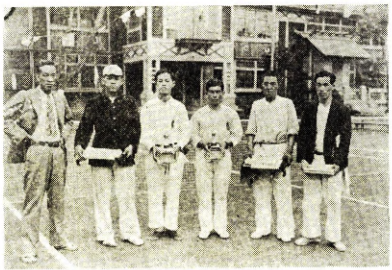
㈢　陸上競技

運動会

矢吹小学校では明治二十一年（一八八八）から運動会を開催した記録があるが、各小学校では明治時代から運動会を実施していた。明治三十一年十月七日、川崎・矢吹・三神・中畑・滑津・信夫六校の連合大運動会を矢吹の八幡原で開催した。連合運動会は明治三十三年より春開くようになり、この年は四月二十八日、同三十四年にも開催された。この時のようすを当時の西白河郡視学斎藤鈴太郎の報告書でつぎのように書いてある。「川崎、矢吹、信夫、三神一、二、中畑及滑津七校の連合運動会は、各校の児童無慮一千余名を混じて一団とし、之れを両大隊に分ち、職員も亦会長以下各事項を分担するも、約束命令能く行なわれて其親密なること、一校の運動会を見るが如かりき。平素の訓練想うべし。」



小針コートでのテニス（中畑　小針頓晴蔵）



矢吹小コートで優勝記念（中町　藤田トミ蔵）

明治三十五年の連合運動会も五月十三日、八幡原で開催されたが、その時のようすを信夫小学校の学校日誌はつぎのように記録している。「音楽隊ヲ福島町ヨリ招ヘイシ、遊戯終ル毎ニ奏楽セシメタリ。当地方ニハ珍ラシキ事トテ参観人ハ前年ニ比シ多数ニ上ル。」

明治三十九年には前年が大凶作であったので、運動会のかわりに第四区六校の連合遠足会を挙行し、泉崎の鳥峠に登り、稲荷神社に参拝した（信夫小学校学校日誌）。

この頃は運動会と同じく遠足も運動と言っていたが、明治三十三年五月十日、矢吹村有志一六名が西郷鶴生の奥にある河内渓に、第一回遠足運動会を実施した（智識の戦場）一般の人が遠足運動を実施していた事は珍しかった事であろう。

優　勝　旗

大正六年（一九一七）四月には矢吹小学校で第四区（川崎・矢吹・中畑・三神・信夫）連合運動会が開かれ、同十一年九月には矢吹小学校で、第四区研究会の体操演習会が催されている（信夫小学校学校日誌）。これら運動会もやがて第四区体育大会となり、昭和二年（一九二七）には中畑小学校、同三年十月の大会には三神小学校がそれぞれ優勝している。

大正十年十月十七日、福島師範学校の運動会の番外小学校の六〇〇米競走に、矢吹小学校の生徒も出場した。この時予選で一着になった菊池精二は、決勝で一着になり（記録一分五七秒）、優勝旗を獲得した（出場校七校）このもようを福島民友はつぎのように報じている。

「附添の和知校長はこおどりして喜んで居る。そして嬉しさを禁ずる事が出来ないやうな面持で語る。〈自信だけはある積りで参りましたが、晴れの舞台に出たのだからどうかと思ふて居ましたが、遂に優勝旗を得ました。学校の名誉です。常に学校では体育に重きを置いて居ましたが、其実が漸くみのった様なものです。〉」

矢吹小学校は続いて大正十一年十月十七日の師範学校の運動会に出場した。この時予選を通過した二人は決勝で、平山重雄が一分五七秒で一着、会田勘二が二着と、一、二着を独占し、二連勝を飾った。矢吹小学校では十月三十日に優勝旗披露の秋季運動会を開いて、その優勝を喜んだ（出場校一一校）。

競技会

大正十一年（一九二二）白河高等女学校の運動会で、郡内小学校尋常科女子二〇〇メートル競走に、中畑小学校の生徒が出場し、一着から六着まで独占した。この時女先生達の発案で、ピンクのチヂミという布で、ワンピース式の運動着をつけて出場し、袴にタスキ掛けの他校の生徒を追い抜いて走った。競走のあとで選手達が、＜見物人がみんなで中畑ガンバレと応援してくれた。＞と言って喜んでいたが、実は面白半分に＜ハダカガンバレ＞と声援して呉れたのであった（『百年のあゆみ』）。

大正十三年十月十九日福島師範学校陸上大運動会に出場した中畑小学校生徒が、予選で一着（一分五八秒四）、矢吹小学校の生徒が二着（二分一秒）で決勝に進んだが、入賞できなかった。大正十五年十月十九日の師範学校の運動会に六〇〇メートル競走の決勝で中畑小学校の小針が二着（予選で一着）、三神小学校の佐久間が五着に入った。また女子四〇〇メートルリレーの決勝で中畑小学校チーム（佐藤・鈴木・吉田・笠原）が三着に入賞した。（予選では一分五秒八で二着）

昭和六年（一九三一）九月二十四日、福島の女子師範学校の県下小学校女子籠球大会に出場した中畑小学校高等科女子チームが、強敵女師附属Ａチームと対戦し、善戦したが敗れた。同年十月三十一日の西白河郡児童体育大会で、矢吹小学校の近藤ユキが五〇メートル七秒八、同じく一〇〇メートルで大竹キンが一五秒〇でそれぞれ一着となった。昭和七年十月二十九日、西白河郡小学校児童体育大会で、男子高等科の竹内久雄（矢吹小学校）が走高跳一メートル四三で一着、尋常科の武藤公郎（矢吹小学校）が一〇〇メートル一五秒〇、八〇〇メートルリレーで矢吹小学校チームが二分〇七秒〇で、それぞれ一着となり、女子でも矢吹小学校の生徒が活躍し、走巾跳で矢吹きよが三メートル九八、一〇〇メートル佐藤憲が一五秒〇でそれぞれ一着となった。このように男子も女子も大いに活躍したわけである。

青年の活躍

少年少女ばかりでなく、中学生や青年達の活躍も目ざましかった。

大正十三年（一九二四）九月十四日郡山開成山競馬場で県下中等学校大育大会が開催された。この陸上競技で安積中学校が優勝したが、その時矢吹の会田宗太郎（五年）・菊地精二・野木忠房（以上三年）が活躍している。大正十五年九月二十四日、平で開かれた第五回県下中学校体育大会の走巾跳で、安積中学校の会田勘二（矢吹）が五メー

三神青年団の優勝記念

トル九三で二位に入賞している。また昭和六年（一九三一）十月十七日福島高商主催近県中等学校競技大会に安積中学校が優勝したが、この時矢吹の野木茂は四〇〇メートルで二位に入賞している。

中学生ばかりでなく、矢吹・三神・中畑の各青年団の活躍にも目を見張るばかりであった。大正十二年西白河郡連合青年団競技会で中畑青年団ははじめて優勝したが、選手は跣足（はだし）だった。同十三年には郡代表として五人の選手が県大会に出場、大正十五年の郡大会に一二人の選手が出場し、同九月二十四日平の県大会には郡代表として六人の選手が出場した。この内、鈴木馬次郎は四〇〇メートルに一分三秒六で優勝した。鈴木はその後東北大会で二〇〇メートルに優勝し、東北代表としてその年の明治神宮体育大会に出場したが、この頃が中畑青年団の全盛時代であった。

昭和二年西白河郡連合青年団の体育大会で、三神村青年団が優勝、続いて矢吹方部の体育大会にも三神の青年団が優勝した。この時のことを当時三神小学校長渡辺欣吾はつぎのように回想している。

「昭和二年小学校の児童は岩瀬農学校の各校リレー競技会に出場、優勝旗を受領してきた。……当時の酒井村長をはじめ、村民も大喝采。三本の優勝旗（小学校のリレーと郡大会、矢吹方部の大会で青年団の優勝）を掲げて、自動車で村内をパレードしたこともある」（三神小学校創立百周年記念誌『あゆみ』）。

その後三神村青年団は、昭和三年と同四年の郡連合青年体育大会にも優勝し、三年連続優勝を果たして、優勝旗はわが青年団のものとなり、みんなで喜んだ。三神青年団は矢吹方部でも昭和二年、四年、五年と続けて優勝している。

昭和六年九月二十日白河中学校グラウンドで開催された西白河郡連合青年団体育大会で、矢吹の木田直置が四〇〇メー

トル五八秒〇で一着、一五〇〇メートルで中畑の佐藤吉輝が四分三六秒二、一万メートルでは三神の長沢利三郎が三八分でそれぞれ一着となり、矢吹勢の活躍が目立ったが、八〇〇メートルリレーで一位（一分四五秒六）になった矢吹青年団が優勝、旗を手にした。昭和七年の郡大会では一五〇〇メートルで佐藤吉輝（中畑）が四分四五秒で、小針金七（中畑）が四〇〇メートルに六〇秒〇で一着になっている。昭和九年九月二十四日の郡大会には一〇〇メートル一二秒二で木野内易（三神）が、走巾跳六メートル〇五で小川清美（矢吹）、砲丸投に九メートル五〇で太田弘（三神）が一着となり、三神村青年団が優勝している。昭和七年五月十五日には矢吹の青年が白河中学校と対抗陸上競技会があり、四〇〇メートルで矢吹の野木茂が五八秒六で一着になり、八〇〇メートルリレーで一分四八秒二で矢吹青年チームが勝つなど、この頃三神・中畑・矢吹の青年団の陸上競技に打ち込んだ情熱はすばらしかった。

（石井　亘）